

# 幕末の本草学者阿部喜任（櫟齋）の年譜

平野 満

## はじめに

阿部櫟齋は、享保期に幕府の採葉使として活躍した阿部照任（将翁）の曾孫で、幕末の本草学者として知られる。岩崎灌園・曾占春また東條琴台の門に学び民間に医を営んだが、先祖の照任の業績を誇りとし阿部家の名声を復興したいとの望みが強く、本草学の研究に打ちこんだ。幕府の駒場薬園の臨時職や医学館で開催された薬品会での鑑定補助など幕府の業務にもかかわり、文久年間には幕府の無人島（ムニンシマ＝小笠原諸島）開拓事業に本草学者兼医師として参画した。この開拓事業は軌道に乗る前に対外情勢から中断されてしまったが、後の明治政府による開拓事業に寄与することになった。櫟齋の本草学は曾祖父照任がそうであったように、本草学のうちでもとくに物産学的な分野に熱心であった。

かたわら、天保期以降の江戸の学芸界、とりわけ当時隆盛した書画会などに盛んに出入りして多くの文人墨客と交流をもった。この分野の櫟齋の活躍はそれほど知られていないが、当時の人名録には詩人としても名が出るほどであった。

本稿の表題には便宜上、櫟齋を「本草学者」としたが、近世後期の学術学芸は西洋の近代的学問体系とは異なり、現在の学問区分とは必ずしも一致しない。ここでは阿部櫟齋という一人の人物を取りあげたが、近世後期の学術学芸のあり方として決して特殊ではなく、当時の学者として一般的であった。

私は、近代以降に確立した学問分野の枠組みのなかで近世以前を考察することは、当時の学術学芸のありかたを正しく評価できないと考えている。現在の学問においても、それぞれの分野が有機的な関連をもって成立し展開していることは自明であろう。同様に、近世以前の学術学芸も当時の社会の諸々の関係のなかで、それぞれの分野が有機的な結び付きをもって展開していたはずである。

現在の学問の枠組みを前提に、それぞれの分野の成立・展開過程を考察することはもちろん重要な課題である。こうした考察が実りあるものであるためにも、現在の枠組みから逆上るのではなく、今いちど当時のありかたをそのままに見つめ直すことが必要ではないか。阿部櫟齋という一人の人物の事蹟をたどったのは、こうした思いからである。

本稿は阿部櫟齋の年譜を目的としたので、照任（将翁）やその他の阿部家の人たち

については最小限に触れるに止めた。本文中では喜任を採らず、一般に馴染みのある櫛齋の号を用いた。また、姓については櫛齋自身も阿部と安倍を用いているが、阿部が正しいように思う。為任は阿部より安倍を用いる場合が多い。

阿部櫛齋の祖先は11世紀の陸奥守安倍頼時の直系という。安倍家初代は、11世紀の陸奥守安倍頼時の五男黒沢尻五郎正任の長男七郎が阿波見とともに糠森に逃れ安倍に改名したことからじまるといふ。この安倍七郎(号、孝任)を初代とし、37代目の阿部七郎左衛門(号、敬任)の二男が享保期の採葉使として著名な阿部友之進(名は照任、輝任とも書く。字は伯重。将翁を号す。別号、丹山)で、櫛齋が直接その系譜を引く江戸の阿部家はここに始まる。照任を江戸阿部家の初代として、江戸阿部家は2代義任(幼名求馬、のち友之進)、3代義明(幼名求馬)のち堅任・賢任、生駒家に禄仕して春庵また黙齋・醒齋(『隠居放言』『落星石』の項に「余先考醒齋」とみえる)とも号した。4代を継いだのが喜任(櫛齋)である。父義明(春庵)には長男信任があったが、次男の櫛齋が家督を継いでいる。どんな事情があったのかは不明。信任には「諭抄紙の法」を述べた『製楮要訣』の著があるという(『隠居放言』『枹楡滑之』の記事)が、未詳。喜任(櫛齋)の跡は第5代為任(幼名若、のち春庵・米象・友之進、碧海と号す)、第6代一三と続いている<sup>1)</sup>。

\* \* \* \* \*

## 文化2年(1805)戊辰 1歳

○阿部櫛齋、江戸に生まれる。

櫛齋の草稿本『草木育種続編』例言十五則[天保戊戌9年]の第十二則に、「予江戸に生れ江戸に生長す」とある。『南嶼建白書』<sup>2)</sup>に含まれる自筆文書の末尾署名に、「文久二戌年十一月/阿部将翁(印)/戊五十八才」と記す。逆算すると文化2年(1805)の生まれ。

櫛齋の父賢任は、宝暦10年(1760)春に大坂の戸田旭山宅で開催された本草会に出席したといふ<sup>3)</sup>。『隠居放言』『海井』の条に「先考賢任曰宝暦庚辰春戸田旭山会藥物于時南都藤田某具之」とある。海井は『隠居放言』には、「或曰水瀘石」ともされ、『文会録』(同年5月出版)には、たしかに南都藤田七兵衛が「水瀘石紅毛産方言レキステイン」として出品している。賢任はわざわざ大坂まで出掛けて、この会に出席するほど熱心な本草学者だった。詳細は不明だが、ここに集った本草学者たちと交流があったはずである。賢任の著書は残っていないが、「阿魏 ハナウト」(『隠居放言』)に「先考常和大黄、茴香、橙皮等、為丸料、治虫積」、また「福祿 シマウマ」(同)に「喜任按俗謂之間道馬先考賢任曰往年西洋人舶載来予家嘗貯

其真図焉」と賢任が西洋人の齎したシマウマの写生図を所蔵していたという記事がみえ、その研究ぶりが窺える。

## 文政元年(1818) 戊寅 14歳

○6月28日、谷村元珉の口入により岩崎灌園の又玄堂に入門する。

谷村元珉は松平遠江守家来で、今年5月に入門したばかりであった。『文化十四丑年ヨリ入門控帳』<sup>(4)</sup>には「同(文化寅六月)廿八日 谷村元珉口入 阿部友之進」とある。

この署名に続いて「同七月八日 阿部友之進同断 葉原昌之助 後改阿部求馬」の名前がある。葉原昌之助はわずか14歳で入門したばかりの櫟斎の口入によって入門したのである。両者はよほど親密な関係にあったと想像できる。葉原昌之助の署名の左脇にある「後改阿部求馬」の加筆は、後に何らかの理由により阿部姓を名乗ることになったことを意味しているのではないか(阿部求馬については、文政3年11月『多識問答』記事を参照)。疑問のまま記す。阿部家では父春庵もそうだが、幼名に求馬と名付けることが多い。

○曾占春著『張方薬注』<sup>(5)</sup>(全77丁)を筆写する。

本書は占春が北越の医・井玄良の求めに応じて著したものの。『傷寒論』『金匱要略』所載の薬方から水土金石類23種、草類96種、製造類10種、木類26種、鱗介虫獸人類29種の総計184種を解説する。「寛政甲(庚)戌之冬十二月望前一日」の占春識語から、寛政2年の成立。巻末の遊び紙表に「文政元年／櫟斎写」とある。

## 文政3年(1820) 庚辰 16歳

○11月上旬、阿部求馬は児嶋磯五郎とともに『多識問答』<sup>(6)</sup>を筆写する。

『多識問答』は平澤元愷問・程劔南答「写生画帖菜穀類」、平澤元愷問・程赤城答「写生帖雑木類」、平澤元愷問・王世吉答「写生画帖問答」、平澤元愷問・王世吉答「写生画帖問答雑草」を筆写したもの。「多識問答 天地」の題簽、また「多識問答 天(地)」の扉をもつ。第38丁裏および巻末の遊び紙裏には「文政三庚辰年／仲冬月上旬書之終／児嶋磯五郎 阿部求馬写之(「政斎」の白文朱印)」とある。朱印から、求馬は政斎とも名乗ったことがわかるが、櫟斎との関係は不明。巻頭には「春菴損衣食聚書」の朱文方印が捺されているから、櫟斎の血縁か。

## 文政4年(1821)辛巳 17歳

○7月10日、曾占春著『周定王救荒本草和名選』<sup>(7)</sup>(全30丁)を筆写する。

題簽はほとんど遺失しており、その上から「占春先生救荒本草和名選」の墨書(東博の目録ではこの書名を採る)。扉に「救荒本草和名選」、用箋の表丁版心右端に「救荒本草和名選」。内題および尾題は「周定王救荒本草和名選」。占春の「寛政丙辰之夏五月」序から寛政8年5月の成立。

第1丁表に「櫟齋」,「漫圃齋蔵」の2顆あり。上欄には櫟齋による書き込みが多い。第20丁裏「槭樹芽楮蟻掌江戸」の上欄に「ウリノキ喜任」とあり。卷末の尾題の下に「忍齋蔵」の墨書、これに被せて「漫圃齋蔵」の朱印。卷末の遊び紙表に「文政四巳年七月十日写畢」「阿部氏」の墨書あり。卷末遊び紙の裏には樹木の白描図(無名)を描いた紙片が貼付され、紙片の下部に隠れるように欧文署名があるが、判読できない。おそらく、櫟齋によるものだろう。

## 文政5年(1822)壬午 18歳

○正月、白翁著「琵琶湖魚名解」(宝暦10年5月序)および彭城藤右衛門・宮梅三十郎・清河永左衛門「清朝俗名」(午10月,午12月)を筆写する<sup>(8)</sup>。合綴して1冊。

前者は淡水魚の魚名。卷末題に「湖水并江河ノ魚名解」とある。後者は長崎の唐通辞による清人から得た魚名の書き留め。後表紙の見返しに「文政五年春正月吉旦/書于櫟齋之北窓/阿部喜任」の墨書あり。卷頭に「灌園」の白文朱印がある。櫟齋の筆写したものが岩崎灌園の蔵書となったか。

## 文政9年(1826)丙戌 22歳

○5月22日、春庵は曾占春著『占春齋続禽志』<sup>(9)</sup>(写本1冊,全15丁)を筆写する。

後表紙見返しに「文政九丙戌年/夏五月廿二日」の逆文字が透けて見える。「春菴損衣食所聚」(朱文方印)がある。この朱印は父春庵の旧蔵書であることをいう櫟齋の押印。

## 文政10年(1827)丁亥 23歳

○薩摩国佐多薬園に移植した福建連紅県産の巴豆が、この年始めて実を結ぶ。櫟齋はこの種子を師曾占春に乞い得て自園に植え、はじめて巴豆の莖

葉を見る。櫟齋は翌文政11年、幕府の薬園に献上した。この苗は天保8(1837)年には成長して6尺に及ぶという<sup>(10)</sup>。

福建連紅県の産を薩州の佐多に移すもの文政十年始て実を結ぶ。是を占春先生より乞ひ得て園に植ゑ始めて巴豆の莖葉を視る。(中略)文政戊子九月官園に上るもの今已に高さ六尺に及ぶ。予嘗て巴豆考あり。

○この年夏、武州秩父郡・比企郡に採薬し、鍾乳洞中に石燕を得る<sup>(11)</sup>。

○『呂宏昭薬品答』<sup>(12)</sup>を筆写する。

東博所蔵の『質問志』には平沢元愷「瓊浦偶筆」、曾占春「質疑草木略引」、[附録中山草木]、「中山動植積名」、曾占春「附録中山土産」、「草木略」、「質問草木略」、呉継志編・曾占春校「質問草木略」(重複)、「呂宏昭薬品答」、「正徳質問」が含まれる。

「附録中山草木」の本文末に「庚辰の夏五月十五日曾槃」とあり、文政3庚辰年5月に成稿した曾占春の著。同書末尾に「文政十年丁亥歳秋八月書于椿堂北窓之下／菴圃」,[呂宏昭薬品答]の末尾には「文政丁亥歳秋八月上旬／書写椿堂北窓之燈火 菴圃」の櫟齋識語がある。このころ櫟齋は書齋号を椿堂ともいったらしい。「質問草木略」の尾題の下には「門人 阿部喜任校写」と占春の門人であることを明記する。「質問草木略」(重複)の末尾に「享父珍秘」[菴圃架蔵]の朱文印がある。

## 文政11年(1828) 戊子 24歳

○正月18日、岩崎常正の又玄堂で開かれた第1回「本草会」の出席者20名の中に阿部友之進あり。

又玄堂の本草会は8の日を会日とし、8日・18日・28日に開催された。この会の出席者名簿『本草会出席簿』<sup>(13)</sup>(文政11・12年の2年分だけの記録)が残る。『出席簿』では、2度だけ「阿倍友之進」と記されるほかは「阿部友之進」。

櫟齋の出席日は正月28日、2月8日、同18日、同28日、3月28日、4月18日、同28日、5月8日、同28日、6月8日、同18日、同28日、7月8日、同18日、同28日、8月28日、9月8日、同28日、10月8日、同18日、11月18日、同28日、12月8日納会、翌文政12年は2月8日発会、同18日、同28日、3月8日、同18日、4月18日、同28日、5月8日、同18日、同28日、6月8日、同18日、同28日、7月8日、同18日、8月8日、10月8日、同28日、11月28日、12月8日納会。

以上44回の出席にたいして欠席は20回（うち定例外の採葉が2回）で、門人中もっとも出席率が高い。樸斎の師灌園への傾倒ぶりが窺える。

『出席簿』文政11年2月28日の阿部友之進の名前の上に「三月二日救荒二六七拝借仕候。五日返上仕候」、同じく4月28日には「外三ノ上再借」、文政12年7月8日には「蒙二卷返上」とあり、樸斎が灌園から『救荒本草』第二・第六・第七卷、『外三』『啓蒙』第二卷を借り出していることが判明する。『救荒本草』『外三』は『救荒本草通解』『綱救外編』卷之三で、いずれも灌園の著。『啓蒙』は小野蘭山の『本草綱目啓蒙』か。

○8月、樸斎編著『将翁軒禽譜』<sup>(14)</sup> 2冊の草稿が成る。

書題簽で「将翁軒禽譜 乾（坤）」。「乾坤」とも下小口書に「将翁禽譜」。内題は無い。乾の巻末（第72丁裏）に「文政十一戊子年秋八月書／喜任」とある。内題が無いが、題簽・目録題から書名は『将翁軒禽譜』としてよい。乾の扉には「将翁軒百千鳥禽譜目次」がある。東洋文庫および国会図書館所蔵の写本が書名を『将翁軒百千鳥』としているのはこの目次題によるか。著者名は明記されないが、書名の「将翁軒」の号は時に樸斎も用いているもので、阿部樸斎が著者であることを示す。また、乾の巻末識語は樸斎の自筆であることをいう。文字から判断しても明らかに樸斎の手になるものである。乾は目次5丁（鶉之部・鳩鴿類）・本文72丁。坤は本文65丁。本書には数種の刷り用箋が用いられているが、いずれも樸斎が他書にも使用している。本書に用いられる用箋は以下の5種である。

①青色の刷り用箋。四周単辺。枠内縦186×横137mm。半丁に10行。白口黒魚尾。

②淡灰色の刷り用箋。四周子持枠。枠内縦179×横135mm。半丁に11行。白口黒魚尾。魚尾の下に「卷之」。

③くすんだ青色の刷り用箋。四周子持枠。枠内縦179×横135mm。半丁に11行。版心の下部に「漫圃蔵」。

④③と同板だが、魚尾の下に「卷之」の文字が加えられた用箋。

⑤くすんだ青色の刷り用箋。天地単辺左右子持枠。枠内縦182×横133mm。半丁に11行。版心に「又新消夏録／卷／巴菽園菜本」とある。

内容は目次に「鶉之部・鳩鴿類」とあったとおり、シギ・ハト類の276種の鳥に関する記事と諸鳥の飼育法（乾、第64丁～72丁）から成る。

目次にある「コローンホーケル・ヤールホーケル・鳳鳥パラテイスホーゲル」などは明らかに外国産の鳥で、蘭書の翻訳記事や西洋人からの伝聞

によっている。乾第72丁裏の「夜光雁」の記事に「弘化丙午八月薩州ヨリ  
真写ニテ鑑定ニ来ル」とみえるのは後の増補だろう。

○この年秋、舜水先生談話『時物正誤』<sup>(15)</sup> 1冊(全24丁)を筆写する。

本文中にわずかながら櫟齋の按文がみえる。卷末に「文政十一戊子秋抄  
于櫟齋窓下此日冷風蕭條精神頗蕪矣／漫圃 阿部喜任」とある。本書の用  
箋は、第11丁を除いて少し暗い青色の刷用箋。四周子持枠(枠内：縦169  
×横135)、半丁11行、版心に「漫圃蔵」と刷られる。最終丁用箋の「漫圃  
蔵」の部分が切り取られている。理由は不明。本文中に櫟齋の按文あり。

## 文政12年(1829)己丑 25歳

○2月16日、曾占春『春之七草(内題は「春の七くさ」)』<sup>(16)</sup> 1冊(全17丁)  
を筆写する。

巻頭に「春菴損衣食所聚」の朱印あり。扉裏の櫟齋識語に「春菜考者曾  
先生所著也。其原本己丑之災属于烏有。故乞柳亭主人所蔵、然白魚之喰少  
有關文。別一本。仍両本相照彼是校讐取善捨惡補闕正誤而写焉／文政十二  
仲春望後一日／草顛傲吏 阿部喜任父書於櫟齋東軒」。

この年3月21日神田佐久間町から出火、明石橋にあった占春宅が類焼、  
書庫も焼け落ちて歴年の自著も悉く灰燼した。占春は桜田の薩摩藩邸に寓  
居することになった。櫟齋は柳亭主人の蔵本を借り、別の一本と校合する  
ことで本書を筆写した。時に、櫟齋による書き込み、後の所蔵者越智通澄  
による補筆がある。櫟齋の識語に「仲春」とあるが、火災後とすれば3月  
以降でなければならない。櫟齋はさらに、卷末に「文政十二年仲春望後日  
櫟齋喜写了、雨濛之(一字不明)花落昼滴地生香時」とも識す。占春邸焼  
失と筆写の時期の齟齬については不詳とせねばならない。元表紙見返しに  
は、柳亭による『庭訓往来左貫注』の抜き書きと識語・考証まで筆写して  
「巴菽園」と署名する。また、元の後表紙には櫟齋によって漢詩らしきも  
のが記される。

本書の成立は寛政7年正月。本文に続く占春の識語に「ことし寛政七の  
としむつきのはしめ、人のもとむるまゝに春の七種のくさ〜をかいつめ  
つゝしるしぬれと、せはきかたみ(筐)にもれぬることも猶なとせ万代の  
春とゝもにつみそへはやとてなむ、曾永年稿」。卷末には占春の門人安田  
静による識語「予嘗て櫟堂先生の門に遊、戊午の夏偶先生の筭記を晒す、  
其中に七種菜考の料あり、披覧一遇するに、また茶菁に収むるも空しと覚

え一通を騰写して、秋夜先生の閑をうか、ひ再び正をこひ架蔵の珍とす、時に庚申の秋書肆某にいたし梓に寿してなかく人々の佳玩に伝ふるのみ、安田静識<sup>マツ</sup>がある。占春の『春の七くさ』<sup>(17)</sup> 1巻1冊は寛政12年9月に板行されており、板本には上記と全く同文の占春・安田静の識語がある。樸齋が筆写した柳亭所蔵本は板本の写本だったか。

後に樸齋は溪斎英泉の色刷り画を添えた一枚刷り『春菜七種考』を板行している。また、天保5年(1834)正月の樸齋識語をもつ『春菜七種考』なる写本が残っている。本文は同文だが、前者は年紀がなかった。この写本はおそらく上記一枚刷り草稿本の写しと思われる。(天保5年の記事を参照のこと)

- この年7月、『巴豆考』<sup>(18)</sup> 一枚(木板色刷)を板行する。現存するものは少ない。

寛政年間に琉球から薩摩藩へ齎された巴豆の苗が文政10年はじめて花実をつけた。樸齋は薩摩藩医であった師曾占春からこの実5房を得て自園中に植えて育てた。本図は樸齋が自園に繁茂する巴豆を写生し、解説を付したもの。

筆者は①坂本浩然『琉球奇花写真底稿』に綴じ込まれる1点、②高知県立牧野植物園の1点(牧野富太郎による写本。東大本と同板の写本。以下の考察では東大本に代表させ本書にはふれない)、③④平戸の松浦史料博物館に蔵される2点の計4点を知るのみ。巴豆の発芽から成長までを写生した彩色図は樸齋の自写図である。樸齋の解説文は東陽閑思亮の書による。ただし、東大本と松浦本2点の解説文は異板で、若干の異同がある。

『巴豆考』解説に「嘗聞、寛政年間、琉球貢巴豆活本於薩州、芒幾蕃殖、至文政十年、始着花実、因頼吾占春先生乞其実、先生贈以五房、乃種之園中、壅治灌溉、為日已久、既而察之、一日而根、五日而葉、十日而枝」と、種子入手の経緯と蒔種以後の目<sup>マラバレル</sup>に載る二蘇の説や蘭書『麻羅拔兒草木譜』の図を参考に、この草の同定を試みている。その結果、この草は罌子桐<sup>トクニ</sup>の類でオランダ人が蓖麻とするのは正しくないとする。ここまでは諸本とも同文。ただし、文中の句点は東大本では「。」、松浦本では「。」。

以下、松浦本2点は「予幼奉家学。常慨嘆 本邦未産巴菝也。而今幸得之。因写真状。以示同好之士云。／文政十二季歳次己丑穉七月樸齋阿部喜任識[阿部将翁四世孫(白文方印)][阿部喜任(朱文方印)]」と結ぶ。東大本では、この前に家祖将翁の功績をたたえ、家祖将翁も言及しておらず



他の本草学者も究明していない珍種の巴豆を得たことを誇る以下の文が挿入され、上記の文に続けられる。「昔者予祖翁将翁。応（平出）／徳廟之徴。釈褐 東都。奉 命採葉已三十年矣。表掲諸家所未聞見者。／数百品奉之於 官。其他如 本邦未産品。亦啓之於 官。

官命取之異域。使翁培養之。爾後世頗明嘗草之学焉。而至巴菽。曾祖之／所未及言。而諸家亦所不及質也。（以下「予幼奉家学」に続く）。末尾の署名も「文政十二季歳次己丑穉七月／将翁四世之孫樸齋阿部喜任識〔阿部将翁四世孫（白文方印）〕と「将翁四世之孫」が加えられ、2行にされている。このため、平戸本は本文と署名を合わせて19行、東大本は24行となって東大本の方が紙面の横が長くなっている。

のち天保2年、栗本丹洲は『物産叢書』<sup>(19)</sup>第2冊で「阿部喜任ノ巴豆ノ図説又考モアリテ奇ナリトス」,「巴豆, 往年蛮舶載来種子ヲ薩州ニテ種蒔セル者, 樹ヲナシ花実ヲ着ク。其腊葉ヲ一看シ珍賞ノ餘, 自筆写真ヲ蔵ス」と記している。

○彩色図譜『類集写真 卷之九』<sup>(20)</sup>を著す。成立年不明。便宜上、ここに記す。

成立年や書誌的な詳細は不明。現状は、和装袋綴本の綴じ糸をはずして一枚ずつにした状態になっている。原本は未見だが、版心に「漫園架蔵」と刷られる用箋が用いられていること、「マツグミ」の図に喜任の按文があること、筆跡および下記に述べる「巴豆」の図から阿部樸齋の自筆稿本と判断できる。

「巴豆圖中」の図は樸齋の一枚刷『巴豆考』の図と酷似する。『類集写真』で「巴豆圖中」とある図は、一枚刷の中心に描かれる成長した巴豆の図と同図である。また、丸善書店刊行の図録で「沈香」図の右に示される発芽から苗までの成長過程の図は沈香ではなく、『巴豆考』に描かれる巴豆の成長過程図である。一枚刷「巴豆考」で一面に描かれた図が『類集写真』では、同じ図を二面に分けて示している。樸齋は自園に成育する巴豆を生じたのである。

○この年、はじめて気吹舎に平田篤胤を訪ねる<sup>(21)</sup>。用件等は不明。

## 天保元年（1830）庚寅 26歳

○春、樸齋阿部喜任纂輯『聯珠詩格名物図考』<sup>(22)</sup>草部2巻2冊を板行する。

大窪詩仏と曾占春が序を寄せる。詩仏と占春が親しかったことは、享和3年に占春の著「烹茶樵書」と詩仏の著「茶寮図贊」が合冊されて出版<sup>(23)</sup>

されたり、詩仏と大野頭齋の校訂により文政7年に出版された翁榴庵著『花暦百詠』<sup>(24)</sup> (和刻本)の巻末に曾占春が「百花和称記」を付していることから知られる。櫟齋の初めての板行書である本書に詩仏が序を寄せたのは師であった占春の配慮があったのかもしれない。櫟齋と詩仏はこの後、書画会などを通して急速に親密度を増してゆく。

第2冊の奥附は「文政十三庚寅春新鐫／橋齋岡田清福画（「よもやま」の朱印）／木村嘉平剗刷／東都書林 須原屋伊八／松本屋平助／和泉屋庄次郎」。第1冊の見返しに「巴菽園蔵」とあり「巴菽園」の朱印がある。用箋の版心下部には「巴菽園蔵」と刷られる。元の于齋著『聯珠詩格』に出る58種の植物を考証し図を付したもの。図は岡田清福（橋齋）による。岡田橋齋は、この翌年に板行された岩崎灌園『本草図譜』巻五・巻八で常正による原図の模写を担当している。巻一の目録には「巻一 草部／巻二 草部／巻三 木部／巻四 鳥部／巻五 獣部／巻六 虫部／巻七 鱗部／巻八 金石部」とあり、全8巻の予定であった。巻二の奥附にある出版案内には「聯珠詩格名物図考 木鳥獸／虫魚部近刻」とあるが、未刊に終わる。写本も残っていないようである。未刊に終わった『草木育種統編』第31丁表には「聯珠詩格名物図考卷之四／東都 阿部喜任」とある。内容は『草木育種統編』本文の続きだが、この丁だけ版心に「聯珠詩格名物図考卷之<sup>マ</sup>」とある刷り用箋が用いられている。「巻四鳥部」を準備していたことの傍証となろう（天保9年の項参照）。

この時72歳であった占春は、26歳の愛弟子櫟齋の初めての本格的な著書の板行にあたって序を寄せた。序には次のような事柄が述べられる。櫟齋は少年のころから、遠祖丹山氏の遺業を再興する願いをもって本草学に志し、占春に師事したという。占春は櫟齋のこうした心情を、入門の節あるいは何かの折りに耳にしていたにちがいない。本草学の師として若い頃から櫟齋を見てきた占春のこの言葉は信頼に足る。このころ櫟齋の学は『農経』に精通し、多くの品物に精通してその「辛苦五毒ノ味」を弁別できるようになったという。ここに、櫟齋の本草の学は既に成ったという。『農経』は『神農本草経』のことで、占春も『農経講義』3巻を著している。櫟齋はさらに詩書をも読み、詩に賦されるところの飛潜動植あるいは野草・閑花にいたるまで研究した。ここに名物の学もまた成るといふ。こうして本書が成ったのだと。遠祖丹山氏没後百年にして櫟齋が本書を成したことによって、その遺業も空しいからずと。

櫟斎の遠祖「丹山氏」とは宝暦3年(1753)に没した享保の採葉使阿部照任(号将翁)でなければならない。東條琴台『先哲叢談続編』<sup>(25)</sup> 卷之四の「阿部将翁」の記事中に「名ハ輝任。字ハ丹山。将翁軒ト号ス。通称ハ友之進」とあり、照任に丹山の号があったことを裏付けており、照任が丹山とも呼ばれたらしいことを知るが、『先哲叢談続編』と占春序のほかに照任を丹山とした例を知らない<sup>(26)</sup>。

占春は序末尾の署名に、「福建曾庸山八世孫」「占春曾槃」の刷り印を添え、「時年七十有二」と記している。櫟斎がよく用いる「阿部将翁四世孫」の称は師占春を真似たものであろう。この例にかぎらず、櫟斎は占春とよく似た特徴のある刷り用箋を用いるなど、師を踏襲する癖があったようだ。

櫟斎のもう一人の師であった東條琴台の編著に『統唐宋聯珠詩格』<sup>(27)</sup> 2冊(嘉永6年刊)がある。櫟斎に『新刊唐宋千家聯珠詩格』(明治13年遺著として刊)に訓点を付した編著があるのは、琴台の『統唐宋聯珠詩格』を引き継いだものであったのかもしれない。櫟斎が単に訓点を付すにとどめず、本書にみえる自然物の名称を考察したことにこそ、櫟斎の本旨が本草学にあったことを示している。近世の本草学には和歌詩文の名物考証も切り離すことのできないものであった。

## 天保2年(1831)辛卯 24歳

○栗本丹洲「的具私」(天保2年8月28日識。『物産叢書』<sup>(28)</sup> 第4冊に収められる)の記事中、テグスの製法について「屢製シテ精功ニ至ルノ術口伝アリト友人櫟斎阿部友之進語ニテ聞クマ、ニ爰ニ記ス」と櫟斎からの伝聞を載せる。栗本丹洲(瑞見)は櫟斎のことを友人という。

なお、東大総合図書館所蔵の『東都釣場独稽古』<sup>(29)</sup>(刊年未詳)の袋には「阿部櫟斎著」の墨書がある。この袋は所蔵者(田中芳男旧蔵なので、芳男による可能性もある)が後に付したものと思われ、覚えとして書いたのだろう。本書には「便勢庵待阿弥選」とあって著者の本名は不明。内容から櫟斎の著と確定できるだけの根拠を見出せない。この墨書はこうした著書が櫟斎の著書であっても不思議ではないと考えられたことを示している。上記のようにテグスの製法に詳しくあったこともその証しである。本文中に「さば、文化三年の夏、江戸にて始て喰出す」や「あじ、文化十一年六月より七月中頃迄雨ふらず」の記事がある。本書には文化14年の筆写本も残っているから、文化12~13年頃の成立か。

○9月、櫟齋の校訂になる宋の范成大著『梅譜菊譜』<sup>(30)</sup> 1冊を板行。

曾占春と寺門静軒が序を寄せる。占春の序は櫟齋と占春門下の同僚であった坂本浩雪の書に成る。天保12年秋、櫟齋自跋。版心には「巴菽園」とある。奥附の年紀は「天保二年辛卯秋九月発兌」。売り出し書肆は京都勝村治右衛門・大坂秋田屋太右衛門・江戸和泉屋吉兵衛、木村嘉平の刻。

### 天保3年(1832) 壬辰 28歳

○3月、『櫻欄樹藝考』<sup>(31)</sup>の稿成る。

「草木育種続編卷ノ下目録」の末尾に「櫻欄樹藝考附録合装」とあるから、『櫻欄樹藝考』は『草木育種続編』巻之下の附録として出板する予定だったらしい。本書は『草木育種続編』草稿の巻之上(天保9年成)と巻之下の間に合綴される。著者名の部分は切り取られて穴になっており、その右に朱筆で「蔽牛散人著」とある。蔽牛散人は櫟齋の号。『櫻欄樹藝考』の巻末には「天保三壬辰年三月(2字分切り取られて穴)主人識」。穴の右に朱筆で「静春」とされる。切り取られた部分には別の号が書かれていたのを、櫟齋自身が書き改めたと思われる。

書き出しは、「夫、<sup>しゆる</sup>櫻欄の国家有用の益たる事、先輩既に其事を論せりと櫻欄樹の用途を列挙し、植え付け方等を記して、「武家も屋敷の間地あらは花木無益のものを殖る事なくしてシユロ<sup>マ</sup>をうゆべし」と説く。また、暖地で椰子がさまざまに利用されている例をあげ、このように櫻欄を利用すれば「一家一国の用を悉く足」し、椰子にも優る品という。さらに、実からの育て方、陰陽燥湿土地を選ばず生育するから櫻欄には荒地荒村も良圃良田たりうることを説く。最後に「五穀は国家の基本にして<sup>たいいち</sup>専一の本務なり。良田を廃し樹を栽るにあらず。経済の才智ある人、よく此事をとき示し山野に不用の雑樹を生ぜしむるなかれ。猶、他の桐<sup>ほか</sup>檜<sup>きりひの</sup>櫟<sup>きけ</sup>榲<sup>やく</sup>等<sup>あきち</sup>の殖方培養悉く編輯なすべし。異日刻成をまつへしと云ふ」と、山野に櫻欄をはじめ有用の樹木を植えることを説く。桐・檜以下の樹木についても培養法等を著して別に出板する予定というが、写本も残っていない。

○この年夏、相州箱根に採葉し、箱根山中に檀の一種を得て、これに黄恵武慈由、また桑養と命名する<sup>(32)</sup>。

○この年秋、奥州の岩城に採葉する。このとき、岩城地方で紙の製造に「楡皮之粘汁」を用いているのを見て、枹楡皮が紙を滑らかにすることをはじめて知る。また、鼠李の実を得る<sup>(33)</sup>。

この記事中、櫛齋は「家兄信任著製楮要訣以諭抄紙之法」と、兄信任に『製楮要訣』の著があるというが、『製楮要訣』の所在を知らない。

- 9月に板行された畑銀鷄『書画薈粹』初編<sup>(34)</sup> 中之巻に櫛齋の名が載る。

「櫛齋」の筆跡と印、蜂の図を付す。「本草 名喜任、号巴菽園 下谷和泉橋通り阿部友進／江戸ノ人、年若シテ学ヲコノミ、将翁ノ遺業ヲツギテ本草ノ学ヲ専ニス」。

- この年「小冬日」の寺門静軒序をもって、櫛齋阿部喜任纂述『格物瑣言』<sup>(35)</sup> 1冊を板行する。

本文7丁。版心には「巴菽園」と刷られる。書店名がみえないので私家版か。現存もきわめて少ない。茅膏菜・雪茶・金縷梅・蠟辨花の4種について考証する。第4丁表に資生圃すなわち馬場大助の描くところの三州産の茅膏菜図、第4丁裏には「万香亭花譜所図」を櫛齋が模写した越中産の毛氈苔の図があり、櫛齋が緒鞭会のメンバーとも交流があったこと証す。このほか、物印忙<sup>ウエイマン</sup>などの西洋博物学書の説を紹介しつつ、櫛齋自身が「度々捏斯」や「度祿設刺」の『六百藥品』などから模写した図を載せる。なお、本書の内題に「格物瑣言卷之一」とあるから、卷之二以下を予定していたらしい（明治元年の『格物瑣言イリス草考』参照）。

## 天保4年(1833) 癸巳 29歳

- 畑銀鷄『銀鷄一睡南柯乃夢』<sup>(36)</sup> (天保6年刊) に跋を寄せる。巻頭の「連月廿五日於平亭書画会諸先生入来之図」中に、「櫛齋先醒」として描かれる。

本書は当時の書画会の様子を夢に託して描いたもの。櫛齋も書画会の常連であったことが窺える。櫛齋の著書に関わった文人、絵師や書家たちもこうした集会の仲間として知り合ったものだろう。櫛齋は跋の冒頭に「余が友人たる銀鷄ぬし」と書き始めている。跋の末尾は「癸巳残秋芋喰ながら月見るといふ一日前の夜／巴菽園主人本石街の偶居に題」。

- この年の夏、佐橋節翁・田丸直暢・飯室昌榎・浅香直光の要請により、美濃・三河両国へ採葉。チドリ蘭・絲金カラ松草・ボタン草・紫背タツナミ草を得る。

『珍卉図説』<sup>(37)</sup> の記事に「天保四年ノ夏、阿部櫛齋美濃三河両国ノ採葉ニ得タリ」(チドリ蘭)、「此草、先年ヨリ間々目撃スレドモノノ出ス所ヲ詳ニセス。天保四年同心ノ緒鞭家阿部櫛齋ニ託シテ美濃三河ニ草ヲ採ラシメシ時、多ク獲タリ。」(ボタン草) とある。

『珍卉図説』は、上記4名からなる「同盟」の研究集会の記録で、天保6年8月に成った。この4名は後の赭鞭会の有力メンバーとなる。櫟斎がこの頃から、この4名と本草研究をとおした親密な関係にあったことは注目すべきである。

○櫟斎阿部喜任纂述『救歉挙要』<sup>(38)</sup> 卷之上下1冊、天保4年9月例言・刊。

題簽および見返しは「豊年教種」。縦180×横120mm。見返しに「巴菽園蔵版」とあるものが初板。いくつかの同板による板本があるが、他は後刷り。東條琴台、畑銀鷄が序を寄せる。

櫟斎の例言によれば、先祖阿部将翁が86歳のとき<sup>(39)</sup> 享保17年西国飢饉の際に「辟穀の方」を著して幕府に奉り多くの人を救った故事にならって、此の小冊子を記すという。内容は家翁阿部将翁（照任）の説、自身（櫟斎）が試みた方、加うるに中国の本草書『救荒本草』『本草綱目』『野菜譜』『荒政輯要』『荒政要覧』などから飢饉に備うべき記事を抜粋し俗文に訳したもの。末尾には「毒ある艸木の類」6種を載せ図説する。このうち、「黄精葉鉤吻・どくうつき・かはらうつき」の3図は櫟斎自身の写生図である。卷之下第4丁表～裏には、暖国では鳳尾蕉を植えておき飢饉に備えるといひ、蘇鉄から澱粉を製する法を紹介する。

本書巻末にある出板案内に「救歉挙要後編 近刻 前編にもれたる事、又毒草毒木のるゐをくわしく誌す」とあるので、後編を予定していたようだが未刊に終わったらしい。

出板案内には「荒政輯要清本翻刻/櫟斎先生校 九卷」ともあり、櫟斎が本書の参考文献にあげる『荒政輯要』を校訂した和刻本を出板したようだが未見。

序を寄せた畑銀鷄は天保4年『御代の宝』<sup>(40)</sup>『日ごとの心得』<sup>(41)</sup>を著し、櫟斎の師東條琴台は『補饑新書』<sup>(42)</sup> 卷之上下を著して飢饉に備えた。

櫟斎旧蔵書に高野長英著・渡辺華山挿画『勸農備荒二物考』<sup>(43)</sup>（天保7年刊）がある。「櫟斎」「静春菴室」の印顆をもつ。序文末の余白には「静園主人喜任有」、巻末に「巴菽園主人」の墨書がある。序文の撰者名「白鶴義斎藤通」の左には「遠藤克助」の墨書。見返しに櫟斎の手で「嘉永三年十月廿九日自画」とあるが、これの意味するところは不明。

○この年、福井春水の発起により、毎月二十日山崎美成の宅において疑問会を開く。櫟斎もこの会に参加し討議に加わる。会の参加者は屋代（弘賢）、山崎美成、福井春水、石田醒斎、雲山、阿部喜任（櫟斎）、本多隆仙、立原任（杏所）、大窪兼輔、鈴木一菴、荻谷氏、田中兵部大輔吉政、宮川氏、岡

野孫十郎，志賀理齋，頼惟柔，晶山の17名。

山崎美成によるこの会の記録『疑問録』<sup>(44)</sup> (全38の疑問と回答から成る)の一部を抄出する。

疑問録自天保壬辰十一月至癸巳十二月  
自甲午正月至十一月

○秧螞蟻 青腰虫の一名，

雲山

清ノ李調元が童山集に，滅徒詩一篇あり，滅徒とは湿瘡を愈すことゝぞ，湿ハ他人へ伝染するものゆへ，清俗に徒といへり，秧螞蟻にてその湿瘡を治療せしときの詩といふ

美成記

青腰虫本草綱目卷四十二二十三葉表，

陳藏器本草拾遺云，虫大如中蟻，赤色腰中青黒似狗獾一尾而尖有短翅能飛，春夏有之也，主治有大毒着人皮肉腫起，剥人面皮除卵孚，至骨者亦尽食惡瘡瘰肉殺癬虫，

将翁ノ本草徴義十卷曰，青腰虫ノ異種ナリ，二種アリ，俗ニ「アホシゲトウ」ト云，其形白蟻はありニ似テ短翅アリ，大イサ馬蟻ノ如ク，腰ノ正中ニ青黒色ノ横紋アリ，尾尖ニ一ノ小針アリ，又一種ハ状チ前種ト同フシテ，但腰間ノ横紋青白色ナルヲ異リトス，故ニ俗此ヲ「シラシゲトウ」ト名ヅク，喜任按ニ，先年駒場ノ辺ニテ見ル白蟻ヨリモ大ニシツカリトシタル虫也，狗獾未詳，

癸巳之夏四月

樸齋阿部喜任

李調元ノ全詩ヲ鈔書シ教示シ敢乞，

美成按ニ，秧螞蟻ノ秧ハ字書ニ禾苗トアリ，サレバ馬蟻卵ノカヘリテ未ダ長ゼサルモノナルベシ，螞ハ馬字ナルベキヲ，下ノ蟻字ノ虫辺ヲ承タルモノナリ，又俗ニアラシゲトウシラシゲトウト云ハ，蟻ノ横紋弓ノ重籐ニ似タルヨリノ名ナリ，青白ハ其色ナリ，

## 天保5年(1834) 甲午 30歳

○年不明だが，これより先に『枕草子草木考』<sup>(45)</sup>の稿成る。写本で伝わる。

清少納言の『枕草子』に出てくる草木について和漢の本草書を用いて考証したもの。

巻頭の内題は「枕草子艸木考／樸齋 阿閉喜任著」，第8丁にある内題は「枕草紙名物考／樸齋 安倍喜任著」。

「さくら」の条に「予友浩雪坂本氏もさくらの真図の上手なりて，予駒場の御園にありて，まれの司なりしに，御園に奇品数十種ありし，櫻願久

保栄左衛門といえる人は青山長者ケ丸にありて、其園に数百種の品ありしを悉く御園に奉りし、予別に其譜記あり、こゝに略しぬ」という。坂本浩雪は桜花図の名手で占春門下の同僚。樸齋は久保栄左衛門が駒場薬園に奉った数百種の桜樹の「譜記」を著したというのが所在を知らない。因に、浩雪には久保の長者丸桜園の桜を描いた『桜譜』（天保13年成）、『群桜花譜』の著がある。

「駒場の御園にありて、まれの司なりしに」とあるように、このころ樸齋は幕府の駒場薬園で臨時的な職務に携わったらしい。

○正月、『春菜七草考』<sup>(46)</sup>の稿成る。

仮綴じ本（全5丁）。巻末に「天保五年甲午春正月／樸齋 阿部喜任纂述」。これは、次項に述べる一枚摺『春菜七草考』として出板された草稿の写しと思われる。

本書について、樸齋は『枕草子艸木考』の「わかな」の条で「予か将翁先生安倍照任七種弁占春曾先生の春の七くさ等あり、予も春の七種考ありて詳にしるしたれば」と言及している。

○正月23日、阿部輝任著『硫黄盃根元製正誤』<sup>(47)</sup>（寛保4年正月刊）1冊を入手する。

後表紙の見返しに「天保五甲午之春正月廿三日此書を得たり。東條君此書を赤坂の刻刷某より得たりともいふ／四世之孫阿部喜任」の墨書がある。東條琴台から譲り受けたか。

○この年の春の序をもって、『桜堤竹枝』<sup>(48)</sup>を板行する。楽木書屋（樸齋）蔵板。

本書には町庵散人（樸齋）の狂詩集「続々吉原詩」と柳堤主人「迷樓候史」とが合冊され、見返しに「桜堤竹枝」の書名がある。「続々吉原詩」は柏木如亭・菊池五山の『吉原竹枝詞二篇』を継いだもので、「迷樓候史」は石川雅望の「北里十二時」を漢訳したもの。静軒先生閔、楽木書屋蔵。寺門静軒の校閲で、静軒の序、東條琴台の序（中根半偃の書）、蛇山外史（堤它山）の跋。本文中には47人の文人や画家が挿絵や詩を寄せており、樸齋の交友の広さが窺える。『江戸現存名家一覽』<sup>(49)</sup>「詩人」の部には阿部樸齋の名がみえ、樸齋が詩にも名があったことが知られる。

「続々吉原詩」は樸齋の狂詩37首が収められ、末尾に樸齋の識語「此レ予往年賦スル所口、実ニ一時ノ遊戯ニ係ル。一气ニ筆ヲ走ラセ、句コトニ調シ字コトニ練ルニ暇アラズ。深ク筐底ニ蔵シテ、以テ蠹腹ヲ飽シム。近



日偶々友人ニ搜リ出遭ル。予ヲ強ヒテ之ヲ梓セシム。盖シ亦タ、飽飯ヲ弄スルノ活計ナリ。看官、工拙ヲ以テ誚ト為スコト勿レ。申午春日識於本石丁橋居町菴散人カ咸」がある。また、蛇山外史の跋に「町庵散人、香奩ノ体ニ長ス。遂ニ都下詩人ノ技倆ヲ追ヒ続々吉原詞ヲ作り、以テ同好ノ客ニ饋ル（下略）」と、櫟齋の詩は香奩ノ体に長じたという。

櫟齋はまた「迷樓候史」の序題として、「麗艷篇成字々香生花彩筆釀春陽燈紅桃盡天収眺読了迷樓十二章 櫟齋疇士」の詩を寄せる。

「続々吉原詩」の著者「町庵散人」は住所日本橋石丁の町名を合わせた櫟齋の号である。天保初年ごろの板行と推定されている藤田萬樹編『江戸現存名家一覽』「詩人」の部に「阿部櫟齋」、カ「物産」の部に「阿部町菴」とある。

楽木書屋も「櫟」の文字を分けてできた蔵板者としての櫟齋の号である。櫟齋が楽木を号したことは、小笠原島の開拓事業に携わった際の日記『豆嶼行記』<sup>(50)</sup>の中で、しばしば楽木の名で発句を詠んでいることによって裏付けられる。慶応4年に刊行された『吉原細見』には「楽木山人」の名で序を寄せており、この署名の下には櫟齋が関防印として用いることが多い「山中宰相」の刷り印があるから、「楽木山人」は櫟齋のことと断定してよい。

## 天保7年(1836)丙申 32歳

○閏4月26日、両国柳橋の料亭河内屋で柳川重信の書画会があり、櫟齋も出席する。櫟齋はこの席で、この頃書画会では25人の肝煎を定めたと聞いて、『書画会肝煎鍋』という戯れ書一卷を著して出版する計画を語ったという<sup>(51)</sup>。

櫟齋は学者・文人・画家・戯作者たちと幅広い交りを持ち、彼らが集まる書画会にも頻繁に参加した。『書画会肝煎鍋』はこうした文人墨客たちとの交友のなかで戯著されたのである（天保9年の項を参照）。

先に述べた『桜堤竹枝』や以下に述べる『江戸名物詩初編』『茶菓詩』などの狂詩書もこうした交友の中から生み出され、櫟齋が私家版として板行、配布したものである。

○秋、方外道人（木下梅庵）著『江戸名物詩初編』<sup>(52)</sup>を楽木書屋の蔵板で私家版として板行。

東條琴台の序、櫟齋の跋を付す。刊年は櫟齋跋の末尾に「刻成之日喜書之云丙申」とあるのと、琴台序の年紀「丙申秋」による。見返しに「楽木書屋蔵」（「楽木」朱印）とあり魁星印があり、文人集会の図「諸先生品諸名」が「其一」「其二」として第6丁裏～第7丁裏（第7丁裏の左枠外に

〔富田幸三郎刻〕の1丁半にあるもの、また第24丁表にある秋峩女史の図が彩色刷りされるものが初板と思われる。上記のもののほか、落丁が補われ、さらに4丁の「諸先生品諸名」が増補され前板の諸先生の名が訂正されるものがある。他にも諸板が知られるが略す。

本書の「諸先生品諸名物之図」(第6丁裏)右下には僧体の櫟齋が鼻をかんでいる図が載る。『江戸名物詩』に名がみえる人物は『桜堤竹枝』の人物と重なる者が多い。両書が同様の交友関係のなかからできあがった事情を物語る。なお、第25丁裏に松嵐の詩をともなう坂本浩雪の描く桜花図が載るが、この桜花図は『桜堤竹枝』の浩雪桜花図と署名・図柄とも酷似する。全体を右に寄せ、一花を削除するほか、花卉を減らすなどわずかな修正がなされる。この修正は上部の余白に松嵐の詩を入れた為と思われる。『桜堤竹枝』の桜花図のまま上部に詩が入ると、いかにも紙面が重く感じられる。共通の蔵板者だから可能な改定であるといえよう。

○楽木書屋の蔵板で方外道人著『茶菓詩』<sup>(53)</sup>を板行する。刊年未詳だが、仮にここに記す。

本書の序に続く1丁(裏丁に「銅脉先生肖像」)は、版心にわずか手を入れているが、『江戸名物詩初編』の第4丁と同板である。両者とも同様の仲間うちで作られ、ともに櫟齋の蔵板であることから流用されたのである。見返しに「小倉菴蔵」とあるものが初板と思われる。これは「茶菓子」を戯して「茶菓詩」としたのに合わせた小倉餡を連想させる本書限りの櫟齋の戯名である。

## 天保8年(1837)丁酉 33歳

○9月、『草木育種後編』<sup>(54)</sup>巻之上下2巻2冊を板行。師岩崎灌園編『草木育種』上下2巻2冊(文化15年正月刊)の後編として著したもの。

本文は同一の板木を用いながら、何度も版を重ねている。管見では以下の11種を知る。①奥附に「文化十五戊寅正月」の年紀をもち、京都勝村治右衛門・大坂河内屋喜兵衛・江戸須原屋茂兵衛・山城屋佐兵衛の発行書林4店の名を記す(この奥附は岩崎灌園『草木育種』二刷の奥附の板木をそのまま流用したもの。『草木育種』の初刷奥附は植村藤右衛門・泉本八兵衛・須原屋茂兵衛・山城屋佐兵衛の名を記す)。②奥附に「文政八年乙酉九月」の年紀、江戸書林・玉山堂山城屋佐兵衛の名を記す。③奥附に「文政十三庚寅年九月」の年紀をもち、江戸書林・須原屋茂兵衛と山城屋佐兵

衛の名を記す。奥附には他の板には見られない「芳草之部鬪出／湿草之部同」の出板予告がある。なお、本書は架蔵本によるが、巻之上を欠いており巻之上に関する書誌の事項は不明。④奥附に「天保四癸巳年」の年紀をもち、江戸書林・山城屋佐兵衛の名を記す。⑤奥附に「天保丁酉秋九月」（天保8年）の年紀をもち、製本所として江戸の本屋8店の名前を連ねる。見返しには他の板にはみられない北斗七星・鬼・龍を描く魁星印がある。⑧奥附に三都書肆／勝村治右衛門・秋田屋太右衛門・須原屋茂兵衛の名前がある。⑨奥附に書店名の無いもの。⑩「文化十五年戊寅正月新鑄／明治九年五月十八日版權免許」、稲田佐兵衛・同源吉出版のもので、見返しに魁星印をもつ。⑪明治36年4月25日に博文堂が出版したもの。（見返しは無記。奥附は活版印刷）。なお、見返しはすべて同板。

本書には天保8年長月の花木緑蔭主人如村の序（中根半仙書）、天保8年秋の巴菽園主人（樸斎）の例言がある。本文中「鶯蘭」の記事に「天保八年の夏、はじめて薩州より来る」とあるから、文化15年の出板はあり得ない。天保8年9月の板行が正しいはずである。あるいは書肆が前後編を1組で販売するための処置として、同時に板行した形をとったと推定されるが、紛らわしい。諸板を精査すると、板木の疵から同一の板による刷りと判断できる。本書は灌園の『草木育種』とともに、同じ板木によって明治にいたるまで版を重ね長く読まれた。

本書の例言に、「書中猶漏る所あるは続編を以て補ふべし」と続編が予告されている。③の出版案内によれば、その内容は「芳草之部」と「湿草之部」であった。予告どおり、『草木育種続編』上下2巻は翌天保9年4月に草稿が成り、玉山堂山城屋佐兵衛発兌の予定で、東條琴台と優婆塞常講の序文も用意されたが、未刊におわった（天保9年の項参照）。

なお、架蔵本『草木育種後編』（刊記のない「江戸書肆千鐘房・玉山堂・万笈堂発兌」板）は巻頭に「喜任」の白文朱印をもつ樸斎旧蔵書で、樸斎による朱筆がみられる。朱筆には「楓槿曲直瀬君弘化丙午年一株ヲ八丈へ送ルト云」（下20表、「巴豆」の上欄）、「天保ノ年間、予豆州房州へ送ルモノ多シ」（下20裏「橄欖」の上欄）のほか、人名・品名に傍線を施すなどがある。

『草木育種後編』巻之上にある樸斎による例言の第1則で、本書は灌園の『前編』に漏れたところを補うという。例言末の署名は「丁酉之秋月移花日巴菽園主人識」。内題の脇には「江戸 樸斎 阿部喜任蒼粹」とされる。「蒼粹」は植物栽培法の粹を集めたといった意味か。この例のように、

漢文学や漢詩の知識が豊かであった証左といえるかもしれないが、樸齋は普通にはあまり使用されない用語を使う癖がある。著書の後表紙や見返しなどに走り書き風に詩や歌を認めることも多い。

本文中には前編に倣って培養法の図が添えられる。これらの画の作者は岩崎灌園の嫡男岩崎信正、楓溪、立晁、梅天、信尹。このうち信正がもっとも多くの図を画いている。樸齋自身も「芭菽園・喜任」の署名のもとに挿画を描いている。

「立晁写」の署名がある「鳳梨」の図（巻之下、第5丁裏）は「今、琉球人の図するものを縮写して其全形を示す」という。この図のもととなったのは伊藤篤太郎の指摘したように、寛政6年（1794）と同7年の曾占春識語のある『〔鳳梨の図〕』<sup>(55)</sup> だろう。占春識語に、占春が薩摩にあった寛政6年秋、琉球人から鳳梨図を贈られた。占春は同年冬江戸に帰ったのち、改めて模写を作り考証に備えたという。この模写にあたったのは司馬江漢かと推定される。『〔鳳梨の図〕』の曾占春識語の末尾余白に「司馬峻／S Kookam」の署名がある。本書の挿画はこの江漢模写図をさらに立晁が模したものである。江漢模写図と似た図柄ながら、3つ描かれていた果実が2つになったり、2粒の種子の図が省かれる等、かならずしも江漢図の忠実な模写ではない。

『草木育種後編』巻之上の巻末に「採薬之心得」の条がある。この記事は樸齋自身が実際の採薬での経験を踏まえて記されたと思われ、興味深い。以下に引用しておく（漢字は総ルビに近いが適宜略し、私に句読点を付した）。

凡、遠国へ採薬に行には、先此山にて採薬せんと思は、其辺に宿<sup>もとめ</sup>を投て、其辺樵夫山伐<sup>きこりやましれうし</sup>獵夫炭たきの類をき、て、其ものに山の郷導<sup>あんない</sup>を乞ふべし。其もの呼び話談し、棟柱などの財を尋ぬるにあらざるを覚<sup>さと</sup>すべし。郷導者に籃<sup>あんないしや</sup>を負はせ、己れも籃<sup>かご</sup>を携へて行べし。己れは水苔<sup>け</sup>をとり負せたる籃には草木を入れへし。○深山にて異薬奇草を得て遠く送り生育せんと思ふには先山を採薬、奇草をとり、水苔をとり、又防己<sup>せきだかつら</sup>石血の類、細く柔らかき蔓を採るべし。さて、採たる草は庭の陰地にならべ、一種同類のものと思は、其中に入れ、部を分ち木と草と幾色にも分け置くべし。木にても草にても土を振り落し、二三根或は五六根よせ、あまり枝多く根も多きは伐り去り小根斗りにし、根を苔にて包み、先の蔓にて随分かたくまくべし。草は其<sup>しょう</sup>性の強弱を考へ、其類をあつめ、又前の如く苔にて包むべ

し。水を根へ斗りかけてよし。又盆へ水を入れ、其中へ一度ツ、ざつと浸して出し、土上に並へ置てもよし。又明日も此如くして、弥某の日、発足せんと思ふ時、其処にて薬肆か荒物屋にて線香の箱を求めて、其箱の中へ入れへし。先、木の類を入れ、次に草の類を入れ、又木の類を入れ、随分しつかりと詰めてよし。此時、初日採りたる品あまり乾くものは又水を少しかけ、少し時過て詰べし。板のふたを釘付にしてよし。湿り過たるはくさるなり。

以下、箱の作り方・採取した苗の植え付け方・育て方を説き、最後に「苔と蔓は其ま、空地へ並へ、蔓も植え置べし。予、会津より採葉の苔の中より思はざる実生を得たり」という。この苔から生えたのは何だったろう。さらに、採葉の道具を寸法入りの図解で示す。懇切を極めた指導である。

巻之上の「班葉間道の事」に興味深い記事がみえる。「班葉間」とは班入りの葉のことをいい、享保のころより愛玩がはじまったという。この記事中、花粉交配によって班入り植物を生み出す西洋の説が紹介されている。

○又近来荷蘭の説、花の雌雄薬あり。雄木雌木ありて、花薬交接の論によりて考るに、譬へば菘或は菜薺に班入りありて、又別種の菘菜薺に班を生せしめんと思は、其菘の花開く比に班葉の菘の花粉を振蕩て、実を結びたるを採りて蒔けば、班いりの奇菘を得べし。

櫟齋は花粉交配によって奇種を入手する説を紹介するだけで、自身で試みてはいないようである。続いて、藪下の勇蔵なる植木屋が接ぎ木によって班入り種を接いだ所、台木に結んだ実から班入り2本、青葉2本を得たという話を紹介し、この例のように他の植物を接ぐことを勧める。櫟齋には、台木の花に接ぎ芽の花粉が交配して班入りが生じたのではないかとは思ひ及ばなかったのだろうか。さまざまな植物に花粉交配を試みることによって品種を改良したり新種を作り出すことには思い至らなかつたようだ。

○この年12月18日、下谷三絃溝（三味線堀）の東條琴台新居で開催された書画会の幹事役十名のうちに櫟齋の名がある。

この書画会は琴台の新居改修費用を募るため友人知己が開いたものであった。百余名が出席し、一人あたり金壹分を醸出、総額25両の収入があったという。『栖枝小言』<sup>(56)</sup>には、出席した都下の名家165人の名前が列挙される。165人が1分ずつ出すとすれば、41両余のはずである。差額は必要経費だったか。

○この年、櫟齋宅で開催された物産会で無人島の話が出る<sup>(57)</sup>。

物産会席上、胡椒を植える話が出たので、櫛齋は日本なら八丈島か琉球が向いていると説いたが、花井虎一は胡椒を植えるなら八丈より先き二百里にある無人島が適していると「喋々弁論した」という。無人島の話は櫛齋自身が主張したわけではなかったが、無人島を開発すれば国の利益にもなり、先祖阿部友之進の本草学者としての家名再興の為にも成ると、渡海したいなど話す。櫛齋は無人島開拓にかなり積極的であった。この時に金次郎が持参した「無人島之絵図」を、出所も確かめずに頼まれるまま写してやったという。この「無人島之絵図」は『伊豆七島全図』にも採用された林子平の『三国通覽図説』の附録として板行された「無人島之図」だったろう。この後、無人島開発計画は進められたが幕府の摘発によって頓挫。櫛齋は押込に処せられた。この摘発をきっかけに、事件はいわゆる蛮社の獄へと展開する。

## 天保9年(1838) 戊戌 34歳

○4月、前著『草木育種後編』例言に予告されたとおり、『草木育種続編』<sup>(58)</sup>の草稿が成ったが、未刊におわった。

『草木育種続編』暗紫色(網目模様の空押し)の表紙、四針眼、縦250×横170mm。書題簽で「草木育種続編 上下」。扉には左によせて「草木育種続編 卷之上」、右方に「四十丁」とある。扉の裏には板本の見返しの如く、手書きの枠の中に「櫛齋阿部先生著／草木育種続編／玉山堂発兌」。玉山堂は『後編』の発兌書肆のうちにあった山城屋佐兵衛。

内容は①「草木育種続編叙」「天保九年戊戌四月 琴臺耕撰／星鳩陳人書」(2丁)。この初丁右下に「静春薬室」の朱文方印があり、上から消印が押される。②「贅言」「維時天保九年大歳戊戌四月仏生日／江戸 優婆塞常叢稽首拜書□□」(2丁)。「□□」には刷印を入れる予定だったのだろう。③「草木育種続編／例言十五則」「天保戊戌之農内稻生日雑花繞屋蕙薰四来堂主人喜任識す[阿部喜任・一號葎坪の書き印]」(4丁)。この初丁の右下に「静春薬室」の朱文方印、上から消印。また、初丁右欄外に朱筆で「癸亥の正月一日朱にて可被書入候分」。④「草木育種続編分目」。目録末尾に「都計凡百八十六種培養<sup>ていれ</sup>の法／櫻欄樹藝考<sup>しゅらん</sup>附録合装」とある。⑤本文。本文巻頭は「草木育種続編卷之上／荏土 櫛齋阿部喜任纂述／長州静山有田校」。「例言十五則」からはじめの2則を引用する。

凡、本草物産之学は博聞強記の才ありて審問精到に勞し、衆物を考

験するの量ありて究覈研精せざれば、其性理に通じ醇疵得失を考へて  
紕謬を正し真偽を弁別する事あたわず。予や、至愚の性、極陋の質、  
いつくんど広博を極め詳審を致す事あらんや。斯書録する所る井に坐  
して天を觀、管を以て豹を窺ふなり。読む人、其拙を嘲けるなかれ。

萬彙化育の蕃き生々して息まず。其産を撰び、其良を采る、医の常  
なり。本草既に其産地を記す。此書も亦、其産地を記す。敢て四方の  
異聞を求めて筆するにあらず。予が経過する地を記するのみ。猶、他  
邦にも産する事あるを知るべし。

○この年板行された畑銀鷄『天乃浮橋』<sup>(59)</sup>の巻頭口絵中に櫟斎の姿あり。

○この年の跋をもって『書画会肝煎鍋』<sup>(60)</sup>1冊(全9丁)を板行する。

本書は「天竺浪人戯述」とされ、見返しには「福内鬼外蔵版」とする。  
「天竺浪人・福内鬼外」はどちらも平賀源内の異名として知られるが、こ  
こでは櫟斎のことである。東博本では巻頭に据えられる跋の筆者名「張三  
季四等」の右脇と本文巻頭の著者名「天竺浪人戯述」の右脇に「櫟斎」の  
墨書書き込みがある。東博本にはこのほか伏せられた登場人物名が朱筆で  
加えられ、あるいは語りの部分が「」で区別されるなど多くの書き込み  
がある。国会本にも見返しの「天竺浪人述」の下に「櫟斎」の墨書がみえ、  
本文にも同様の書き入れがある。この書き入れは当時の書画会や文藝界に  
通じた者の仕業であろう、「櫟斎」の墨書書き入れも信じてよいと思われ  
る。売出し書肆名を欠くから、「福内鬼外蔵版」すなわち櫟斎の私家板と  
して配布したのでらう。

源内は宝暦・天明期の本草学に薬物から物産への流れを方向づけて物産学  
の成立に寄与し、文藝分野にも大きな活躍をみせた。櫟斎は本草学研究を  
主としながらも、文人墨客たちと交わり、文藝の世界に遊ぶ自分を源内に  
擬したのである。天明8年の序をもつ源内の伝記『平賀実記』の著者が正体  
不明の人物「櫟斎老人」であることは、上記を考慮すると意味深長である。

櫟斎と親しかった畑銀鷄が両国万八樓での書画会の様子を描いた『鳶葛  
恋之花菱』<sup>(61)</sup>には多くの書画会出席者が登場するが、その中に「於玉ヶ池、  
石町江戸橋近辺より」の参会者として阿部櫟斎の名がみえる。この書画会  
は「皆々揮毫に暇なく、頼む人あれば、頼まるゝ人あり。酒を飲むあれば、  
飲ぬあり。騒ぐ人あり、騒かぬ人あり」といった風で、さまざまな話題が  
飛び交う様が描かれている。

櫟斎のこうした交友は櫟斎自身の性癖もあろうが、彼の師とした東條琴

台の感化も大きかったのではなからうか。文人墨客たちとの交友の中から、『書画会肝煎鍋』のような戯著が成ったのである。なお、本書巻末に「これにもれたるわるくちわ／のちほと御目にかけてましょふ」と、続編を予告しているが成らなかったようだ。

- この年の櫟齋識語をもって、櫟齋阿部喜任誌『地球万国全図』<sup>(62)</sup>（木版色刷り，1 舗）を板行する。

櫟齋識語に、この図は1835年にフランスで刊行されたものを原図とし、櫟齋が昔から所蔵する他の図を参考に縮写したものという。

早稲田大学図書館の洋学文庫には卷子本の『万国全図』が所蔵される。原装かどうかの判断はむずかしいが、自序の附され方からみて、おそらく最初から卷子に仕立てられていたのではないか。これには他にみられない櫟齋による自序が付されている。序の周囲は二球図を囲む枠と同色の茶色の枠で囲まれる。二球図の左端には「図及説 栗原信晁再校」、図説の末尾には「天保九年戊戌春月 櫟齋阿部喜任」とあり、書肆の名はない。私は本図が初板かと考えている。この序はこれまで言及されることがないので紹介する。

#### 万国全図序

巴菽園主人識

夫図者取其易弁也。万国之図。所行于世者。非不精也。雖然披而閱之則茫洋向若耳。故今地界顔色。以表明之。是以区分域別五色盼然。已罔之広。一見則能弁焉。余繼本草之学於祖翁。而考究藥物。其関涉于異域者多矣。故論及地理之学。以梓之而便搜索云 天保戊戌之春

董斎正書

櫟齋は祖翁の本草学を継いで藥物を考究してきた。本草学では異域の産物を研究することも少なくないが、外国の産物を研究するためには地理学を知らずにはおけない。そこで、本図説を出版して搜索の便とするという。櫟齋の世界地理研究は第一義的には本草学研究の補助であって、緊迫を加えつつあった対外情勢に対応したものではなかったことに注意しておきたい。

本図の板木は栗原信晁が買得し、嘉永3年再校を加えたうえで『嘉永校定東西地球 万国全図（元題簽）』として、丁字屋平兵衛から売り出された。

### 天保10年（1839）己亥 35歳

- この年に板行された畑銀鷄『文人穴さがし』<sup>(63)</sup>の登場人物に櫟齋あり。



## 天保12年(1841) 辛丑 37歳

○春、櫻溪主人の著すところの『長楽花譜』<sup>(64)</sup>に序を寄せる。

序の末尾は「櫻溪主人、写数十種、今并録其説、以俟来者、天保辛丑之春、櫛齋主人阿部喜任、識于雑花繞屋蕙薰四来堂」、「山中宰相」「天之我(以下4字不明)」の朱印がある。おおむね半丁に1図、全69品の図(巻末の3品を除いて彩色図)。巻末の遊び紙表に「天保十二年 櫻齋写」の墨書、署名の下には朱筆で「櫻齋」の印が写されている。本文第32丁表に「文久甲子正月写」の墨書あり。

本書を櫛齋の著とする者があるが、序に明らかなようにこの年に成った櫻溪主人の著書で、櫛齋はこれに序を付したのである。櫻溪主人は未詳。

櫛齋は序で、長楽花が何であるかを考証している。雪割草の一名を獐耳細辛とする説を確かめるために、その根を噛んで辛さを確かめて細辛の一種であることを検証したという。その他、諸書の説を引いて長楽花・獐耳細辛・雪割草は同じものであると結論する。以下、本文の内容は雪割草34種の彩色図譜(巻末の3品は無彩色)に雅名を付す。本文第1丁表には「六百薬品 十三綱『レフェルコロイド』蘭『レーフル、コロイド』ノ農友南華生所撫」あるいは「Anemonehepatica」の櫛齋による加筆がみえ、櫛齋が西洋の博物書にも詳しく知っていたことが知られる。

○移山閑人(三木屈齋)『江戸繁昌記・青楼之巻』(天保12年)で、櫛齋は主要人物として登場し、本文挿絵にも描かれるという。櫛齋は本書に題詩を贈るといふ(註59「廓と博物学者」による)。筆者は未見。

## 天保13年(1842) 壬寅 38歳

○この年春の序をもって板行された小冊子、東條琴台『伊豆七島全図』<sup>(65)</sup>に琴台門人として伊豆高田信頌と弘前傍島正心とともに校訂にあたる。

巻頭には林子平『三国通覧図説』附図として板行された「無人島ノ図」および「伊豆七島全図」を色刷りで掲げ、伊豆七島の地誌を記す。巻末には無人島についての記事を付し、かつて平賀源内・林子平や大蔵永常・渡辺華山らが開拓を説いたが、実行されず現在にいたった。海防の観点からも殖産のためにも開発するべきと説く。

櫛齋が東條琴台の門人であったことは、琴台自身がその著『先哲叢談続編』<sup>(66)</sup>巻之四(明治14年刊)の「阿部将翁」記事の末尾に「喜任、字ハ享父。櫛齋ト号ス。善ク家学ヲ継ク。亦、余ニ從テ遊フ」とあるによっても

確認できる。

嘉永3年に本書の増訂版『増訂伊豆七島全図 附無人島八十嶼図/相武房総海岸図』(色刷り, 1舗)が板行され, 絶板に処せられた(嘉永3年の項を参照)。

## 天保14年(1843) 癸卯 39歳

○『隠居放言』(『又新堂百品考』ともいう)の稿成る。以下の写本が残る<sup>(67)</sup>。

①『又新堂百品考』7巻2冊, 杏雨書屋[杏1211]。

櫟斎の自筆草稿本。巻末に朱筆で「天保十四癸卯之歳」とある。各巻の巻頭にある分目題(目録題)・内題・署名・標題を記す。

分目題(目録題)	内題	署名	内容表題
隠居放言卷之一/又新堂百品考卷之一	江戸櫟斎阿部喜任纂述	金石類	
又新堂百品考卷之二/隠居放言卷之二	江戸静春阿部喜任纂述	草類	
隠居放言卷之三/又新堂百品考卷之三	江戸鳳仙阿部喜任纂述	木類	

(以上, 第1冊)

又新堂百品考卷之四/隠居放言卷之四	江戸漫圃阿部喜任纂述	虫豸之部
又新堂百品考卷之五/隠居放言卷之五	江戸又新阿部喜任纂述	(魚類)
又新堂百品考卷之六/隠居放言卷之六	江戸蔽牛阿部喜任纂述	鳥類
隠居放言卷之七/ 隠居放言卷之七	江戸榭町阿部喜任纂述	獸類

\*魚類の表題はない

(以上, 第2冊)

上記からわかるように, 本書の書名は「隠居放言」と「又新堂百品考」混用され, どちらを正式書名とするか判断できない。各巻巻頭の署名は, はじめは櫟斎としたものを貼紙によってそれぞれに訂正しており(巻之七は見せ消ち), 各巻に異なる号を名乗ろうとする櫟斎の趣向が読み取れる。このほか, 櫟斎自身の手によって巻数の訂正ほか多くの加筆訂正がなされており, 草稿本というべきものである。

第1冊の初丁裏には「曾翁 朶園 立圃 梶山 月香 同父 大岩 榕宇 水谷 小松 松翁 桂園 椿庵 灌園先生 萬香亭 家父 櫟斎 小泉や 秋水 占春先生 東亭 春英 多紀 立原 長雋」の名前が覚え書風に記される。これらの人たちは櫟斎が学恩を受け, 実際に交流のあった人であろう。師事した岩崎灌園や曾占春には先生の尊称が用いられる。

第2冊の巻末に曾槃による「巴菽園記」(文政十二年秋七月上澣日),

と櫛齋著「巴豆考」(文政十二歳次己丑秋七月)が附される。この「巴豆考」は文政12年に板行された一枚刷り「巴豆考」(東大本)と同文(文政12年の項を参照)。

②『隠居放言』写本2冊。東博[和943]。

櫛齋自筆の第二草稿本。識語によれば弘化2年の成立か。上欄に「哲」なる者の按文が付され、森養竹による貼紙(「下ヶ札ハ森養竹」とある)も多くみられる。①②ともに櫛齋の自筆。両者の関係は、①が初稿で、②は第二稿というべきもの。巻頭に弘化2年の櫛齋序と曾槃「巴菽園記」、櫛齋著「巴豆考」がある。

なお、下巻の巻末にももとは別冊であったものが合綴されている。これには「放言追加申度候」として「厭油鳥・海鷺哥・酒泉・桐花鳥・長生不一・虫必羽化・土蠱・蕉心簞・新雉・腦子・鶴頭紅・海蠻子」の項目が記され、後の丁にこれらの幾つかの記事がある。この記事が①にないのは当然だが、③にもこの追加部分は筆写されていない。別冊だったからだろう。

③『隠居放言』写本1冊、岩瀬[34—43]。

本書は、②の第二草稿に「哲」なる者と森養竹が加筆した後に、この加筆も含めて忠実に筆写したもの。

④杏雨書屋の1本[杏1273]。

本書は松江長伯著『東夷物産志稿』と合冊される。書題簽は「東都櫛齋阿部喜任纂述／隠居放言／物産百品考／附東夷物産志稿」。題簽から、「物産百品考」が『隠居放言』の別名と意識されていたらしいことがわかる。目録題は「隠居放言総目録一名又新堂百品考」。「又新堂百品考」の書名は①にしか見られないので、①にもとづく筆写と思われる。「巴菽園記」と「巴豆考」が付される。目録の末には「以上分為七冊」とした後に、「巴菽園記／巴豆考」が加えられている。本書では「鳳仙」以下の号も貼紙や訂正によらず、普通に書かれている。表紙に「本草」の丸い朱印がある黒川家旧蔵本。

⑤『隠居放言』写本3冊。杏雨[杏4697]。

内題は「隠居放言」。題簽は「又新堂百品考」で小字の「隠居放言」が添えられる。扉の中央に「隠居放言」と大書される。目録題は「隠居放言総目録一名又新堂百品考」、尾題は「隠居放言又新堂百品考」。これも①にもとづく筆写だろう。巻頭に「巴菽園記」、「巴豆考」がある。

○この年春の鶴鶴貞高（為永春水）序をもって、『訂正補刻 絵本漢楚軍談初編』10巻10冊が板行される。序には「出像の軍記は稗史ニヒトシトイヘドモ 雖等猶僕が筆に不及、於此友人阿部喜任、其余兩三士の多識を以て纂考の為補助」とあり、初輯の刊記には「櫟齋阿部喜任補正」とされる。徳田武氏は、この序の筆者は阿部喜任自身で春水の業を櫟齋が継いだと考えるのが順当とされ、さらに本書は櫟齋がほぼ全面的に著わした可能性が高いという。この考えが妥当なら、櫟齋は『西漢演義伝』を再翻訳できるほどの中国小説通であり、馬琴ばりの読本の文体を駆使でき、翻案の才能も有するほどの読本好きでもあったと結論された<sup>(68)</sup>。なお、二編（10巻10冊）は弘化2年江戸山城屋佐兵衛から出版された。初・二編とも葛飾北斎の挿絵。

## 天保末年～弘化初年ごろ

○天保5年正月に成った草稿「春菜七草考」をもとに、一枚刷りの『春菜七草考』<sup>(69)</sup>（袋には「春の七草考」とある）を板行。

年紀はない。溪齋英泉による彩色図を附す。江戸十軒店の書肆英大助発兌。枠内306×443mm（紙面は縦347×横470mm）。（天保5年の項を参照）櫟齋の「七草考」に溪齋英泉による七草「はこべら・なづな・御形・せり・すゞな・すゞしろ・仏の坐」の彩色図（図面は縦153×横240mm）を附す。本文は松頼主人の書（「天真」の朱印）。櫟齋の署名は「荏土 鳳仙阿部喜任纂述」。署名の下に「阿部喜任」「喜任」の白文朱印2顆。彩色画には「英泉写」の署名と「溪齋」の朱文印がある。

七草図の左上には丸で囲んだ「濱」の印がある。これは月番町名主であった浅草茅町一丁目浜弥兵衛の認印である。この検印によって、『春菜七草考』の板行は天保末年から弘化4年中頃の間と推定できる<sup>(70)</sup>。

売り出された際の袋（縦176×横119mm）の表には、「櫟齋阿部喜任纂述／春の七草考／五全堂開彫」とされ、竹籠に七草を植え付けた彩色図が描かれ、右上には青緑色の熨斗が刷られる。熨斗は売り物ではなく配り物であることを示したのだろう。裏面には「金吹町／阿部友之進」とある。「五全堂」は発兌書肆英大助のことかと思われるが未詳。櫟齋の住所が金吹町となっていることに注意。梅林寺『過去帳』によれば、嘉永2年に没した櫟齋の子の住所も金吹町となっている。櫟齋は天保末年から嘉永の初めの頃、金吹町に住んだことが知られる。

白井光太郎が見聞した七草に関する著作としてあげられている、阿部櫟

斎纂述、淡斎池田義信図、一枚摺彩色図『春の七種考』<sup>(71)</sup>（刊行年月不明）は本図である。池田義信は英泉のこと。

○このころ、櫟斎の私宅で開催された本草会の会日は三之日。東條琴台の張り交ぜ帖『焦後雞肋冊』<sup>(72)</sup>第2集に「閭閻草医／阿部友進／本草会 三之日／居所銀町一丁目西側」なる一枚刷りが張り込まれる。

天保10年いわゆる蚕社の獄に関係して、南町奉行筒井伊賀守から尋問を受けた際、櫟斎は「毎月三ノ日は拙宅の会日に候」と述べ、「いはゆる物産会か」との問いに「左に候」と答えている<sup>(73)</sup>。

また、田中芳男の貼り交ぜ帖『摺拾帖』<sup>(74)</sup>第4巻62丁裏には、柏葉の模様の上に「連月六之日／神農本経 校読／櫟斎阿部喜任／椿山人戯墨 巴菽園蔵」と刷られた紙片が張り込まれる。時期は不明だが、毎月六の日に『神農本草経』の講読会を催している。毎月三の日の会合とは別に開催されたのだろうか。「椿山人」は櫟斎の別号。

## 弘化2年（1844）甲辰 40歳

○4月9日、為任が生まれる<sup>(75)</sup>。

## 弘化3年（1845）乙巳 41歳

○9月『静春随筆』の稿成る。『静春堂雑抄』<sup>(76)</sup>の巻頭に三木脩による叙が合綴される。

『静春堂雑抄』には、現在は新しい表紙が付されているが、元の仮表紙には直接「静春堂雑抄／附又新堂偶筆」と墨書される。巻頭に弘化3年9月12日の年紀をもつ江戸繡田居士三木脩「静春随筆叙」が収められる。その書き出しに「静春随筆四巻、吾友櫟斎阿部先生ノ撰スル所口」とあるから、『静春随筆』は全4巻だったらしい。『静春随筆』そのものは不明。

『静春堂雑抄』は上記のほか本草諸書からの抄録からはじめられ、前半部分は第31丁裏で終わる。ここまでの多くは櫟斎の手に成る抄録であるが、朝倉資景（攷古斎）が筆写して櫟斎に進呈した部分も含まれる。本書の前半には雑多な記事が混在しており、文字どおり雑録である。ここまでが仮表紙の「静春堂雑抄」で、以下が「附又新堂偶筆」と考える。

第32丁表と第46丁裏は手擦れによって汚れており、この丁が元の仮綴の際の表紙だったことを窺わせる。おそらく、後になって他の部分と合綴されたと思われる。第32丁から第46丁までの15丁が『又新堂偶筆』巻之二で

ある。第32丁表には「又新堂偶筆卷之二／荏土 樸齋 阿部喜任纂述」の内題がある。この15丁は版心の上部に「又新消暑録」、下部に「巴菽園葉本」とある青色刷り用箋（ただし、第35丁表から裏にかけてと訂正のために貼付される部分は同板ながら金茶色の刷り用箋）。

「絲杉」に付された樸齋按文の末尾に「予別有考覈、既出前編矣」というから、本書には「絲杉」の記事を含む『又新堂偶筆』巻之一があったことは確かだが、所在不明。なお、樸齋には明治になってから成った『又新堂消暑録』<sup>(77)</sup>巻之七が残っているので、この随筆（雑記）は「又新堂偶筆」「又新堂消暑録」「又新堂随筆」「静春随筆」などと書名は一定していないが、明治にいたるまで書き継がれたものと思われる。因に、樸齋の筆写本には版心に「又新堂消暑録」と刷られた用箋が用いられるものがある。

『又新堂偶筆』巻之二の内容は漢籍や万葉集からの本草関係記事の抜き書きで、樸齋按文を付すものも多い。

#### 嘉永元年（1848）戊申 44歳

○6月24日、樸齋の妻没す。法名は報恩院赤心禅照大姉。梅林寺（東京都台東区）に葬る。

過去帳には何故か神田薬師新道の住所が記される。また、「三州岡崎本多齋宮実母」の記載がある。

#### 嘉永2年（1849）己酉 45歳

○閏4月4日、樸齋の子（法名：紅顔禅童女）没す。過去帳には金吹町と付記される。

○これより以前、樸齋著・畑銀鷄増補『衛生菌譜』2巻2冊成る。畑銀鷄著『現存雷名 江戸文人寿命附 初編』<sup>(78)</sup>（嘉永2年刊）の見返しにある「銀鷄先生著述目録西年出板之部 文錦堂蔵板」の中に「衛生菌譜二冊 此書ハきのこの能毒をしるしたる樸齋翁の著述也。しかるを銀鷄先生増補しておもしろきはなしをくはへて二巻となす」とある。樸齋に『衛生菌譜』の著があったことが知られるが、所在を知らない。

#### 嘉永3年（1850）庚戌 46歳

○6月、栗原信晃は天保9年春の樸齋識語をもつ『万国地球全図』を再校し、『嘉永校定東西地球 万国全図』の題簽を附し、11月板行する<sup>(80)</sup>。栗原信

晁藏板，東都大伝馬町二丁目丁字屋平兵衛の売り出し。

○7月4日，父春庵没す<sup>(81)</sup>。法名は東亭院潭相惠水居士。梅林寺に葬られる。  
春庵の住所は生駒屋敷とある。

○10月晦日，東條琴台の『伊豆国七島全図 附無人島八十嶼并相武総海岸』に江戸湾防備の重要機密であった御固め場所が詳しく書き加えられていることを理由に司直の手が入り，売買が差し止められる。この一件は翌年4月18日に落着し，琴台は以後著述を差止められ，主家榊原家に御預けとなる。琴台は翌年4月29日江戸出立。

本図には「不許売買，五百部頒同志」と刷られているにもかかわらず，この年10月初め頃から，内々に売り出したらしい。下記の『藤岡屋日記』<sup>(82)</sup>には「屋敷方其外を拾匁宛てて売歩候処，余り評判強く候」ため売買禁止とされたが，値段を15匁に上げて売ったという記事がみえる。

櫟斎は琴台門人として本図の校訂者に名を連ねるが，罪は咎められていない。

○十月晦日

伊豆国七島之図并海岸御固メ場之一件

榊原式部太輔抱儒者  
十五人扶持

元居宅ハ下谷

東条文左衛門

立花西門前

琴台 五十歳位

当時宅，本所押上之寮ニ居ル也。

右之図ハ，袋ニ，

伊豆国七島全図

柿（掃）葉山房藏

附無人島八十嶼并相武総海岸

不許売買，五百部頒同志

右之図，巾二尺五寸，長サ三尺七寸

右島々之由来・神社・仏閣之縁起・名物・名産等迄を委敷書記し，浦々御固メ場，出崎・洲迄委敷記。右図を十月初メ頃ヨリ内々にて屋敷方其外を拾匁宛てて売歩候処，余り評判強く候ニ付，弘メ候を禁ぜられ候ニ付，直段十五匁ニ相成候，然ル処，大切成御固メ場所へ他へもらし候事故，上より御手入有之，右作者東条文左衛門ハ榊原家江御預ケニ相成候。

七島が世間一とふやかましく

売買するがはつとふになり

右一件、翌亥年四月十八日落着、向後著述もの御差止め也、同廿九日江戸出立にて、越後高田江差遣し候よし。

### 嘉永4年(1851)以前

○曾占春の著『皇和葦譜』<sup>(83)</sup>を校訂する。『皇和葦譜』は寛政3年(1791)占春の序をもって成立したが、未刊におわった。樸斎は師の遺著を新知見によって校訂したか。内閣文庫蔵本の巻末遊び紙に「嘉永辛亥四月四日病中一読了」とある。誰による識語かは不明だが、本書がこの識語の書かれる以前に成立していたことは疑いない。また、綴じ目に入っていて判読困難ながら、本文末丁左端には「右一冊原本阿部氏蔽牛書屋□□□写以蔵」とある(□□□は判読できない文字)。本書は樸斎の蔵書を筆写したものである。蔽牛書屋は樸斎の書齋号。

### 嘉永6年(1853)癸丑 49歳

○10月、大坂において『増訂伊豆七島全図 附無人島八十嶼図武相房總海岸図』のかぶせ彫りができるが、すでに江戸で絶板に処されていることを理由に売留(発売停止)を命じられる。

大坂本屋仲間の『差定帳』<sup>(84)</sup>には、江戸で絶板とされた本図が大坂で「うつし板」として摺立てて売り出されようとしたが不許可となり、嘉永6年10月15日「伊豆七島之図」の売留を命じた記事がある。

「絶版書目(売買差留開板不免許)」<sup>(85)</sup>に、大坂において本図が嘉永6年11月に「公儀御法度差障之図面」として絶板・売買禁止に処せられたことを記す。「絶版書目」には、「両図共板行摺立人相知れざるも、既に江戸表にて差止められたるものを『うつし板』として摺立たるものに付、絶版申渡、本屋行司え摺立人吟味方申付、売買取扱を禁ず」の附記がある。「既に江戸表にて差止められたるもの」であることが理由とされたのである。江戸での売り止めは嘉永3年10月晦日。

### 安政元年(1854)甲寅 50歳

○嘉永7年(改元して安政元年)正月元日から日記を誌す。『公私日録』<sup>(86)</sup>と題す(全38丁)。

見返しに「元日や四方おさまりし初日哉」の発句。元旦から「吉書始」として「証類本草」を読み始めている。さまざまな人物や書物が登場し、



まことに興味深い内容だが、未検討ゆえ詳細は後に譲る。

○2月28日、森養竹ら17人で採薬行（『公私日録』）。

### 安政2年（1855）乙卯 51歳

○この年4月に板行された乾純水『品物考証』<sup>(87)</sup>（上下2巻1冊）を入手、櫟齋はこれに多くの書き込みをしている。「静春葉室」の朱印あり。書き込みには貝原益軒『大和本草』、水野忠暁『草木錦葉集』、飯沼慾齋『草木図説』を参考にしたものや、「*Macrulageronitogea* S&Z.」（「葺芝」の上欄）のように学名を記すものがある。

### 安政3年（1856）丙辰 52歳

○11月、阿部櫟齋纂述・松浦弘（武四郎）校訂『蝦夷行程記』<sup>(88)</sup> 卷之上・下、2冊を板行。

題簽はそれぞれ「蝦夷行程記西部 上」「蝦夷行程記東部 下」。第1冊の内題は「蝦夷行程記卷之一」「蝦夷行程記卷之上附録」、第2冊の内題は「蝦夷行程記卷之下」とあって、第1冊の表題は「卷之一」と「卷之上」が混在する。巻頭に益堂鈴木善教と大内餘庵の序、および櫟齋自序を付す。巻末に加藤穆清風甫の跋（版心には「序」とされる）を付す。本文の版心には「北海道中記」と刷られる。日本橋通十軒店の江戸書物問屋・播磨屋勝五郎蔵板。本書の成り立ちは以下の自序に詳しい（振り仮名は省略）。

この行程記は、家祖照任の三使採薬行記を規本として、北海隨筆、北夷考証、野作雜記、遭厄日本紀事、奉使紀行、夷談俗語、東夷窃々夜話、赤夷風説考、休明光記、辺要分界図考、銅柱餘録、蝦夷志、弘の蝦夷路程便覧、鈴木益堂の蝦夷旧聞、高橋氏の地球全図、藤田惇齋の蝦夷闔境全図等によりて、纂録せるものにて、所謂文豹一斑なり、予もまた異日普くこの地を經涉し、其天度を測量して、舛誤を糾正せんことを冀ふと爾云

安政三季丙辰夏月櫟齋阿部喜任誌 「山中宰相」（白文方印）

### 安政4年（1857）丁巳 53歳

○5月、阿部家に古くから伝わる『草花図譜』<sup>(89)</sup>に識語を付す。

本文中に享保・元文の記事がみえるから、元文頃の成立か。本文部分は櫟齋のいうように古くから阿部家に伝わったものなのだろう。櫟齋は曾祖

父照任の著と推定している。識語の1丁は他と比較して新しい用箋である。以下に識語を引用する。識語末尾の「静春薬室」は櫟斎の薬室号。

この書は予か家にふるくもち伝ふ所なり、何人の作なるを知らずと雖も、七草考外の画かける所を併せ考ふれば、祖翁照任の見るに随而筆記せるものか、異日浄書して(二字不明)の一助とせんか、其体裁の朴実なる、近時は兎輩も這等の事はなさざるなり、今より百四年前、宝暦四年に昇天せしなれば、こは其前にものせるものか、四世の孫阿部喜任しるす、安政四年丁巳の夏五月なり「静春薬室」(朱文印)

この夏閑を得て近日当否の論あるもの<sup>アキママ</sup>和漢名の一<sup>アキママ</sup>二を認す  
○を加へて古へにまぎれさるよふにす。

内容は表題どおりに、126品の彩色草花図(末尾の1品は無彩色)に名称と簡単な説明。櫟斎による補訂がある。

○6月3日、友人南華春木(画師)の所蔵する『万宝魚譜』を借りて筆写し、櫟斎の見聞するところを増補して櫟斎阿部喜任纂『補輯万宝魚譜』<sup>(90)</sup>を付す。

巻頭識語(「山中宰相」の関防印あり)には「喜任按ニ、コノ編ニ作者ノ<sup>ママ</sup>性名ヲ題セスト雖モ、盖シ丹洲栗本随見翁作ナラン」と、『万宝魚譜』の著者を栗本瑞見と推定している。識語末尾は「安政四年丁巳之夏六月三日、巴菽園主人誌」。署名の下に「阿部喜任」「享父」の朱印が捺された紙片を貼付する。

『補輯万宝魚譜』は各地産のマンボウの彩色図譜で、解剖図や乾肉・塩蔵肉の図を含む17図から成る。このうち「塩蔵肉ノ真図」には「寛政中冬月塩蔵日ヲ経サルモノヲ親看シテ手写ス、腥気ナシ、全身ニ沙アリテ、サメ肌ナリ、粗き皴アリテ斑ヲナス、斑車ノ名アルモ宜ナリ、同僚山本啓俊院瘡ヲ患フルニヨツテ之ヲ贈レリ」とある。臭気や形状を細かく観察していることにも注意したい。ほとんどは画の作者にふれない。一例だけ「東蒙山人所画」とあるが、櫟斎の模写であろう。なかには大槻玄沢の翻訳によって「勇私東斯魚譜」「ヒュブメルコンストウアルデンフツク第五百十七号」「斯葛篤詰兎ウヲイツ第四百九十号」等からの記事を引用して解説するものもある。図は薄様紙に描いたものを貼り付ける。巻末には「安政四年丁巳之夏巴菽園主人揮汗誌之、以自ラ強ノ戒ヲ履ト云」と誌し、関防印と同じ「山中宰相」の白文方印を押す。

本書には4種の用箋が用いられる。①版心に「本草図譜 卷之 獣部 巴菽園栗本」とある刷り用箋、②版心に「懷僊樓」とある刷り用箋、③特

有の飾版心をもつ用箋，④手書きによる界線のものである。②の「懷僊樓」の刷り用箋は時に櫟斎が用いているもので，懷僊樓は櫟斎の書斎号の一つであつたらしい。

①の「本草図譜 卷之 獸部 巴菽園菜本」の刷り用箋には特に注目したい。この用箋の存在は，櫟斎の師岩崎灌園の著『本草図譜』が植物部だけにおわつたのを惜しんだ櫟斎が，『本草図譜 獸部』を著そうとしていたことの証しである。

### 安政 6 年 (1859) 己未 55 歳

○4月，医学館薬品会における鑑定手伝として召し出される<sup>(91)</sup>。

四月朔日越中守殿へ高木幸治郎を以上ル，同日以御書取被仰渡，  
阿部将翁儀ニ付奉願候書付

多紀安常  
町医師

阿部将翁

右将翁儀，物産之学年来研究罷在候間，何卒医学館薬品会之節，鑑定手伝可仕旨被仰付被下置候様仕度，此段奉願候，以上，

未四月

姓名

### 万延元年 (1860) 庚申 56 歳

○喜多村栲窓所蔵の阿部照任著『廻村雜記』<sup>(92)</sup>を大淵常範から贈与される。

表紙に題簽はなく墨書で「廻村雜記 全」とある。見返し左上には「廻村雜記／阿部将翁」と書いた貼紙。1葉目の遊び紙に「喜多村氏蔵書之印」の朱印がある。2葉目の遊び紙には「諸国廻村之節承り候趣／付札ニ仕置候／(以下3字下げ)此断書付札は元御普請役／後御勘定ニ成候佐久間甚八也」とあって，さらに3字下げて「此注文栗本随見翁也／喜任記」と櫟斎の識語(「喜」「任」の朱印)がある。巻末には「祖翁所著廻村雜記／喜多村氏所蔵也／万延庚申之秋九月／大淵君寄贈于予／四世孫 阿部喜任記(「安倍喜任」の朱印)」とある。因に，佐久間甚八について曾占春は「阿部蔣翁といへる人の門生なりと云」(『天工甄録』<sup>(93)</sup>)。

本書は『二十七国採薬記』<sup>(94)</sup>1冊(内閣文庫 [117-1143口])と同内容をもつ。『二十七国採薬記』の巻末には「右二十七国採薬記一冊／鯤斎以蔵本書写畢／于時安政五戊午年九月／堀誠斎(印)」とある。堀誠斎は鯤斎蔵本によって『二十七国採薬記』を筆写したという。因みに，堀誠斎の

筆写本をさらに武田信賢が転写したものが東大小石川植物園蔵『二十七国採薬記』([S2958])である。

上記の写本は鯤齋蔵『二十七国採薬記』によっている。「鯤齋」は栗本鋤雲の号だから、安政5年には鋤雲は『二十七国採薬記』を所蔵していたことがわかる。鋤雲が栗本氏を継いだのは嘉永元年(1848)だから、万延元年に櫛齋の贈られた『廻村雑記』の所蔵者喜多村氏は鋤雲ではなく、喜多村槐園の嗣子栲窓(鋤雲の兄)だろう。鋤雲の『二十七国採薬記』は実家の蔵書を筆写しておいたものだろう。

上に、喜多村氏は喜多村栲窓、大淵君は大淵常範と推定した。喜多村槐園の三男が栗本氏を継いだ栗本鋤雲(六世瑞見)。常範は栗本丹洲(四世瑞見)の孫で栗本氏を出て大淵氏を継いだ。櫛齋が常に祖翁照任の業績を慕い、その著書を集めていることを知った大淵常範が、常範の実家栗本氏を継いだ鋤雲の実家喜多村栲窓に照任の著書『廻村雑記』が所蔵されるのを知り、栲窓に乞うてこれを櫛齋に贈ったと考えたい。『廻村雑記』の書名は、佐久間甚八の識語に「諸国廻村之節承り候趣／付札ニ仕置候」とあるのによったと思われる。

栗本丹洲と親しかった櫛齋は丹洲の没(天保5年)後も、その一族と交流をもったのである。栗本鋤雲は安政5年から蝦夷に移り住み、文久2年箱館奉行支配組頭、同3年箱館奉行として蝦夷の開拓事業に活躍した。櫛齋が北海道に渡ったことがあるらしい(『又新堂随筆』卷之七)が、鋤雲との係わりによったのかもしれない。

## 文久元年(1861)辛酉 57歳

○12月3日、幕府は領土の確認と港湾測量および開拓予備調査のため、軍艦咸臨丸を無人島(小笠原諸島)へ派遣する。(95)。

## 文久2年(1862)壬戌 58歳

○5月9日・10日、父亡羊の遺志をついで山本榕堂が開催した読書室物産会に櫛齋は自著『隠居放言』2冊を出品する(96)。

○5月、櫛齋は幕府の無人島(ムニンシマ)開拓事業の予備調査要員井口栄春の交替要員として採用され、6月18日江戸を出港(97)。8月21日八丈島に上陸。流行中の麻疹の治療に多忙。この時、医者がいなかった八丈島住民のために、日常の病気の簡易治療方『八丈本草』(98)を編集する。本書には

14種の薬草の薬効と用い方が簡略に記される。また、「後年、必ず有用をなすに至らん」と、八丈島に甘草などの薬草を植えた。

○浦賀停泊中の6月21日、幕府の紅葉山文庫から借り出してきたブリュンメ『東印度草木図説』<sup>(99)</sup> (1835年刊、2冊)を取り出して研究している。ブリュンメ著『東印度草木図説』はBlume, C.1. “BIJ-DRAGEN TOT DE FLORA VAN NEDERLANDISH-INDIE.”。

○8月10日、八丈島を出港。同26日無人島(父島)に到着、同27日上陸。

○閏8月1日、櫛齋はこの度の無人島渡海にあたって、先年常州採薬の際に大洗神社の神前でもらってきた石を一個持参。朝夕礼拝のために、母島の御宮に納めた<sup>(100)</sup>。大洗神社の御体は医薬の神・少彦名命という。

○閏8月15日、『南嶼産物志』<sup>(101)</sup>木部(31種)の稿成る。

「無人島産物誌 木部」ともいうべきもの。貼紙による訂正や加筆が多く、未定稿。本書の扉に「閏月十五日稿」とある。本文中には「予閏月廿六日ニ袋沢ニ行ク道ニテ、数十本ヲ見ル」(ツルエイランの記事)をはじめ、欄外に「戌ノ九月十五日・戌ノ九月七日・戌ノ七月十九日」の朱筆がみえるから、その後、手を入れたのだろう。扉裏には「南嶼産物志/木部 閏月十五日藁 三十一種」とあるが、目録には「南嶼産物志/木部 分目(略) 凡三十五品」とある。実際に収められる品数は40品。この後、増補したと考えられる。

扉および分目に「木部」とされるので、草部や魚部・虫部・獣部なども予定したと推定されるが、木部しか残っていない。

○無人島滞在中、『出放題集』<sup>(102)</sup>と題する雑記帳をつくる。

本書は無人島滞在中に感じた折々の心情を発句や漢詩に託して書きつらねたもので、何首かは日記『豆嶼行記』に転載されている。巻頭に「赤道の直下に、や、近ければ、四時ともに草木も、青々見へ、鶯のさなきも、断へず窓の外に聞ゆるにそ、思ひづるまゝを書きつけつ、見る人にも笑ひ給へとて、出放題集といふ」として、「季のさかぬ季もなき出すき発句哉」の句をのせる。いくつかを摘記すると、八丈島で迎えた十五夜には「かげぜんに先づトわんは団子汁」。「役々の方も故郷を憶ふしきりなれば」の詞書きで「見にしむや他人の話す苦勞まで」。西暦の正月が近づくと、「櫛齋の主命を蒙りて此島に植ぬる巴豆や松竹の緑りさかんにめを出せしに、緑ふく松やこゝまで目出度さを」、11月12日には「西洋の正月とて御国旗も建たるにそ、何となく島も春めく朝日哉」。年明けて文久3年正月「此

度も鼓腹の民や御世の春」。読み取れる最後の句は2月3日の「村中のさわきや不時の祝ひもち」。春分には小笠原でも餅を搗いて祝ったとみえる。

○この頃、樸斎は『南嶼建白稿（「献白」を「建白」に訂正してある）』<sup>(103)</sup>に収められる3通の願書を提出している。この史料は『国書総目録』に阿部照任の著として載る『阿部将翁建白稿』（別名「南嶼献白艸」）であるが、阿部樸斎による自筆草稿である。表題紙を含み全10丁。青色の表紙、四針眼、縦278×横188mm。無枠無界線（縦245×横336mm）の用箋の綴りはずして大きめの紙に軽く貼付し、袋綴にして仕立て直してある。

①戊（文久2年）九月の日付をもつもので、棟（一名川苦棟）と必栗香について、その効用・利用法などを述べて小笠原島での試植を勧めたもの。宛所はなく、「阿部将翁」の署名をもつ。

②同年5月5日の日付をもつ御役所宛ての「奉願上候口上覚」。この島に繁茂する常盤カラムシ・ハマボウから糸を採り織物に製すことに付き、努力中と報告。移民のうち「いわ」が織物巧者なので、この者に工夫させ、織物を成功させたい。ついでに、御役所からもこの者によく言い聞かせてほしい、というもの。

③同年11月13日の日付をもつ御詰合御役人中宛ての「奉願上候口上覚」。無人島で培養中の薬草類や栽培植物の肥料にするための糞汁や腐敗物の貯蔵施設の設置、およびそれを汲み取るための柄杓などを渡してほしいという願書。

④同年11月付け、外国方御役所宛ての「奉願上候書付」。樸斎はこの願書に「阿部将翁」と署名し黒印を捺し、名前の脇に「戊五十八才」と年齢を添える。願書の内容は大略次のごとし。

樸斎が命によって小笠原島に詰めるようになって1年が過ぎた。「薬柳并果樹等持渡り樹藝仕候處、土地江相適候と相見え松は緑を生し、竹は筍を添、持渡り候品々等者枯凋無之、追々繁育仕候」。私の研究によれば、この土地は植物の生育に最適である。内地では栽培困難な薬草木や果樹もこの土地では十分育つ。そこで、江戸立出前に植木屋長太郎等に注文しておいた薬艸木や松杉梅縦檜等五百本余を次の船便で送ってほしい。また、私と交替の医師は元私門人で現在は米倉丹後守殿家来の吉野三哲を推薦する。彼ならきっと私の志を継いでくれるはずである。私は老年につき、最近では半身が麻痺した状態である。もともと、交替といっても一先ずのことで、植え付けるべき品々を整えて再びこの島に渡り栽培に努めるつもりで

ある。この土地にあった品々は繁茂し「永世不易之御産物」ともなるだろう。秋にはいったん帰府の上、以上に付き御沙汰いただきたい。

『豆嶋行記』によれば、櫛齋はこのほか8月8日「由比ト田辺トへ建白ト家書ヲ出ス」、6月13日「建白ヲ草ス」、9月27日「交代ノ願書ヲ草ス」と建白書や願書を度々出している。閏8月12日に井口栄春と櫛齋の連名で差し出した御手当加増願いが白井光太郎によって『豆嶋行記』巻末に筆写されている。

- 櫛齋は無人島滞在中、英語の勉強に励んでいる。先行の者から島の先住者が英語を使用することを知らされ、石橋政方編著『英語箋』<sup>(104)</sup>を携行したとみえる。文久2年10月23日には「予、案頭ノ英語箋ヲ読了シテ、語訛レルヲ一ニ校正ス」<sup>(105)</sup>とある。在住の西洋人から教えられたか。のち慶応3年8月、櫛齋は本書から鳥に関する単語を抜粋して『絵入英語箋階梯』（鳥之部）1冊を板行している（慶応3年の項参照）。

『絵入英語箋階梯』<sup>(106)</sup>は鳥名の英文綴りにその発音をカタカナと平仮名で示し、漢名と和名（平仮名あるいはカタカナ表記）を付したもので、服部雪斎による彩色図を添える。

日記中、時に英単語が挟まれる。文久2年10月5日には大風雨に見舞われ、「英人云、タイフウント云。彼カ十二月ノ初旬ニアリト云」と記す。文久3年正月25日には「英語ヲ抄了」とあり、『英語箋』から抄録を作ったのだろう。文久3年2月9日には平野船が到着し、中浜万次郎ほかを上陸する。万次郎は無人島近海で捕鯨を試みるために派遣されたのである。この後、櫛齋の日記にはたびたび万次郎の名が出る。とくに英語を習った事実は記されていないけれども、英語の学習を始めたばかりの櫛齋にはこの上もない教師であったはずである。たとえば、文久3年2月3日には「無人島ヨリ西ノ方三十里許ナリト。テシヤブホエント、日本嶋。即万次郎発見ノ島也。四月下旬、六年許以前ナリト」と記す。2日前に万次郎が櫛齋を尋ねてきたので、この島についてはその時に聞いたのかも知れない。2月9日「英ノ児童ニ教ユルノ書ヲ写シ読ム」。20日、「孟子ヲ講ス。英語ヲ読了」。子供向けの英語入門書を筆写、12日間かかって20日に読了している。『孟子』はだれに講義したのか。推定にすぎないが、英語や海外知識を教えられた万次郎へのお返しだった可能性はないだろうか。

櫛齋が八丈島滞在中に著した『八丈本草』には巻末から17丁にわたる英文（わずかに蘭文が交ざる）が写されている。その最後の丁の袋綴じには

横書きの英文を筆写するために、6本の横罫線を引いた下敷きが挟まれている。この英文には数丁にすぎないが、英単語に和文が加えられており、樫齋の学習の跡がうかがえる。驚くべきことに、その英文は「a, is for Adam, who was the first man; he brokes god's command, and thus sin began. b, is the book, which to guide us is given; though written by men, the words came from heaven.」から始まる。無人島で西洋人の持っていた聖書を借りて筆写したのだろう。樫齋はこの文章が厳しく取り締まられてきたキリスト教の聖書であることを知っていたのだろうか。

このほか。樫齋の英語の教師にふさわしい人物に堀達之助（長崎のオランダ通詞出身の英語通訳官で嘉永6年ペリー来航の際には通訳を勤めた。安政6年から蕃書調所翻訳方・辞書編纂主任として文久2年幕府から刊行された『英和对訳袖珍辞書』の編纂にあたった）の息子堀一郎がいた。無人島へは通訳として出張していたのである。もちろん、英米国の住民との付き合い、ときにはロシア船も着岸し船員たちが上陸してくる環境にあって native speaker にも恵まれていた。短期間のしかも厳しい生活環境のなかで多忙な職務の間隙を縫っての英語学習であったが、樫齋の英語力は着実に進んだことだろう。帰国後は開成所英学教授堀達之助の指導も得られたにちがいない。樫齋の英語力はさらに上達し、この後の研究に役立つことになる。

- 『海雲楼博物雑纂』<sup>(107)</sup>には樫齋や無人島（小笠原諸島）開拓事業にかかわった本草学者たちの調査報告書にもとづいて草された植物記事がみえる。とくに、「テリハノキ・小葉テリハノキ・シマキンカン（樫齋の図）・ハマ、ホノキ（堀達之助の図）」には命名者として阿部樫齋の名前が付され、樫齋の調査記録が採用されている。このうち、シマキンカンはレモンのことで果実は酸味が強く食用には向かないとされたが、明治になって、レモン汁からレモネードを作り、あるいはコチニールによる紅色染めに利用できることが知られ、小笠原で増産が試みられることとなった。

これらの無人島の植物記事は、中断した小笠原島開拓事業の成果をまとめ、後年の開拓再開を期したものだだろう。使用される用箋は「蕃書調所」のものであるが、蕃書調所は文久2年5月に洋書調所、さらに文久3年8月には開成所と改称されている。この仕事は蕃書調所から開成所へ引き継がれたと思われる。亥年の年紀が付されるものが多い。



## 元治元年（1864）甲子 60歳

○橋本玉蘭斎（歌川貞秀）画『万象写真図譜』<sup>(108)</sup>小本1冊（文久甲子孟春新鐫刊）に櫟斎が序を寄せる。

本書には内容の異なるものが何種類もあり、それぞれが板を重ねたようで幾種類かが残る。上野益三氏は本書を櫟斎の著書とする<sup>(109)</sup>が、櫟斎は序を寄せたのみ。

## 慶応2年（1866）丙寅 62歳

○この年『開成所人名録元治元年六月十五日改』<sup>(110)</sup>に「物産学世話心得」として阿部友之進の名がみえる。同役は長田宗十郎、田中仙永。物産学教授出役は伊藤圭介の後任田中芳男。

○4月、『巴菽園貝譜』<sup>(111)</sup>の草稿成る。本書は曾占春『渚の丹敷』に合冊される。暗紫色に網目の模様がある表紙。書題簽で「渚能丹敷並巴菽園貝譜共上下」。第1丁～第50丁が『渚の丹敷』、第51丁～第64丁の14丁が『巴菽園貝譜』。『渚の丹敷』の末尾（第50丁裏）に「灌園」の白文朱印がある。第52丁（丁付なし）が『巴菽園貝譜』の扉になっており「貝譜底稿」とある。扉の右上には朱筆で「一〇四」と書かれた紙片が貼付される。後表紙の見返しに明治13年8月5日の識語（おそらく田中芳男による）を記した紙片が貼付され、本書が岩崎灌園旧蔵書を購入したものであること、また小野職愨所蔵の黒川真頼旧蔵本によって不足を補ったことをいう。表紙には「東京帝室博物館」のラベルも貼付されており、もとは東京国立博物館の所蔵であったものが、何らかの理由で国立科学博物館分館の所蔵となったと考えられる。『巴菽園貝譜』の巻頭（第52丁表）には以下の櫟斎の識語がある。

凡そ貝介類の名を決察するも、又其類を弁析するにも、蚌螺混雑する時は、索め尋ぬるに便利ならず、今其類を別かち、聊か考案を注して児輩の貝螺を決析するの助けとなす 慶応丙寅の夏四月菖蒲生日櫟斎主人阿部喜任将翁菴室の東軒に誌す。

『巴菽園貝譜』の内容は「蚌の類」27種と「蛤類」23種について、それぞれ数行から長くても1丁ほどの解説がなされる。解説のほとんどは大枝流芳『貝尽浦之錦』によっており、櫟斎独自の説はみられない。わずかに、「櫟斎按に」として『台湾府志』や『閩書』『本草綱目』の記事を付記したり、「千鳥貝・鶯介・鳥介」が同品であることをいうにすぎない。『巴菽園

貝譜』の部分には版心に「懷僊樓」とある刷用箋（第52丁～第62丁）が用いられ、第63丁～第64丁と第59丁の一部には版心に「又新消夏録／巻／巴菽園栞本」とある青色刷用箋が貼り継がれている。これらは櫟斎の私製の用箋であり、筆跡も櫟斎のもの（『渚の丹敷』の部分は別の手）に間違いなく、『巴菽園貝譜』は櫟斎の自筆草稿本である。

- 7月15日、櫟斎の母、没す<sup>(112)</sup>。法名は東壽院潭室妙操大姉。梅林寺に葬る。
- 8月9日、開成所物産学世話心得の職にあった櫟斎は、同所物産学出役当分助の鶴田清次郎とともに物産学調御用として多摩地方を廻村する。

この時の先触が「旧多摩郡新町村名主吉野家文書」<sup>(113)</sup>にみえる。8月10日江戸を出発する予定で、以後の順路は新宿・高井戸・府中・日野・羽村・新町・飯能・扇町屋・川越、扇川岸から船で江戸に帰るものであった。具体的な調査の様子や調査結果が判明しないのが残念である。

覚

被下

一 人足壱人  
馬壹匹

開成所物産学出役当分助

鶴田清次郎

被下

一 人足壱人  
馬壹匹

同物産学世話心得

阿部友之進

右者物産学調御用として左之宿村廻村改候ニ付明十日江戸出立致し候依之書面被下人馬差出之渡船場等都而差支無之様可被取計候此先触廻村先々江無遅滞継送り扇河岸留置出向之砌可被相返候以上

寅八月九日

開成所 印

新宿 高井戸 府中  
日野 羽村 新町  
飯能 扇町屋 川越  
扇川岸 船ニ而江戸着

右宿村

間屋年寄

名主中

猶以休泊之儀者御用都合有之候ニ付其所ニおいて申付候間可得其意尤休泊之節木銭米代者当人より御定之通相渡候筈ニ付其段可心得候事

右御先触十二日朝四ツ時羽村より受取即刻飯能村継立申候

同行した鶴田清次郎（清次）は、岩崎灌園の門下で櫟齋と同門。明治5年から同7年にかけて博物館から刊行された一枚刷り『教草』30枚のうち、第七「葛布一覽」、第九「草綿一覽」、第二十七「澱粉一覽上」の撰者。

また、『海雲楼博物雜纂』として残る、蕃書調所の用箋をもちいた動植物図説草稿には鶴田によるものが幾つか見られる。このなかには、文久三年亥臘月開成所物産局において鶴田が写した「安政七年鈴藤氏於米利堅所写 草花写真図」もある。鶴田は絵もできたらしい。鶴田清次画・山田清慶（明治9年）模『[互相植物写生図]』（114）がある。

明治17年7月には岩崎常正著『本草図譜』山草之部2冊を小野職懋校閲・鶴田清次補正により石版印刷、私家版として刊行した（115）。図は荒井延次郎、浦井韶三郎による転写で無彩色。前表紙に「九臯堂蔵版」とあり、「窪田氏蔵」の朱印を押す。また、「本草図譜／板権免許之証・鶴田蔵版之印」の丸印が押され、奥附に鶴田清次を出版人とする。鶴田清次は蔵版者と出版人を兼ねた。「九臯堂」は鶴田清次の堂号である。本書は従来1冊だけ刊行されたようにいわれてきたが、少なくとも山草部2冊が刊行された。第2冊の出版年は不明。第1冊だけに奥附があり第2冊にはないことや、2冊とも全く同じ文政十一年喜多村直撰の序をもつことから、別々に刊行されたと思われる。第1冊「補正本草図譜例言」中に、「其細密者他日題本草図譜解剖図解」として出版の予定というが、これは刊行されなかったらしい。

鶴田が灌園の門人であることは、第1冊にある「補正本草図譜例言」冒頭に「此書予師因灌園岩崎先生之著本草図譜（云々）」というによる。

明治以降は清次の名を用いているので、維新後は改名したか。

○このころ、『本草図譜 獸部』（116）の稿を起こすが未完におわった。

『獸譜』1冊、全44丁。目録題に「本草図譜卷之一／分目／櫟齋阿部喜任輯」とある。題簽には「獸譜 草藁」とある。目録を掲げるところまでにはなっているが、必ずしも目録と本文とは一致せず、本文の動物名の多くは欧文綴りの原語のままである。分目に掲げられる動物は「モルモット・海象・ギラツパ英画・長尾栗鼠・野猫・又猫・ビソン英画・林兎・フロイテル・ヲラング、ウータング・又（以下余白）・エランド・長尾樂生鳥・モルメルヂール・プロンクボッキー・広鼻豕・モル・カイマンコロシ・羚羊并角蘭画・意納夜英画・森鷄」の21種。分目は2丁あるが第2丁表には1種も記されず、裏丁の末尾に森鷄が記される。この余白にはさらに20種ほどを予定していたのだろう。

本文は原則として見開きの左右に彩色図、奇数丁の表と偶数丁裏は余白のまま残される。動物名には漢名・洋名を掲げるが、大半は欧文綴りのままである。彩色図も模写図のほか、薄様紙の模写を貼付したり、洋書原本をそのまま切り取って貼り付けたりと不統一。用いられる洋書はほとんどが英書で、櫟齋の西洋の博物知識の源泉はもはやオランダ語から英語の書物に切り替えられている。次項に述べるように、このころ櫟齋は開成所物産学世話心得として開成所に出仕していた。何種類かの英文博物書が利用されており、これらは開成所の蔵書によったのだらうと思われるが、詳細は未検討である。このころ、櫟齋は英語の翻訳ができるようになっていた。「キラツペ 一名カメル、パールド」には「英国動物学ノ局ニテ印行ナセシ着色ノ真図ノ下ニ誌ルセルヲ訳ス 喜任」として、半丁にわたる訳文を載せる。これはキリン (THE GIRAFFE) のことで、2頭のキリンを描いた彩色図と解説文からなっており、原本から切りとられた英文の図説が訳文の丁間に綴じ込まれている。

本文中、年紀がみえる記事は「天保十四癸卯年長崎奉行持渡ル」(モルモット)、「万延元年四月一日朝四ツ頃、カツクミ村海岸へ流レ寄ル」(海象)。また、用箋の左下欄外には「丙寅ノ七月七日艸」(第5丁裏)「慶応二年八月廿三日」(第9丁裏)、「慶寅ノ秋 九月十八日」(第22丁裏)の日付がみえ、これらはその丁の記事を草した日付の覚えであろう。

本書の用箋は、①版心の下部に「懷僊樓」とある刷り用箋、②版心下部に「巴菽園栞本」とある横罫(半丁15行)の青色の刷り用箋、③もっとも多いのが全44丁のうち40丁に用いられる「本草図譜 卷之 獣部 Ⅱ 巴菽園栞本」と刷られた用箋である。③の刷り用箋は本書が『本草図譜 獣部』の完成にむけた草稿であることを明確に物語っている。『本草図譜 獣部』の書名から、本書が植物部だけにおわった師岩崎灌園の『本草図譜』を引き継ぐものであるという櫟齋の意志を読み取ることができる。

### 慶応3年(1866)丁卯 63歳

○8月、櫟齋著『絵入英語箋階梯』<sup>(117)</sup>(鳥之部)1冊(本文16丁)を板行する。将翁軒蔵板。発兌書肆は江戸日本橋通二丁目山城屋佐兵衛。

元題簽で「英語箋階梯 鳥廻部 全」。第1丁表の扉に「櫟齋阿部先生著／絵入英語箋階梯／将翁軒蔵」。扉裏の「慶応三年七月／本宅鏤板印造」は阿部家蔵板をいうものだらう。7月に刷られ8月の売出しになったと思

われる。奥附は「櫟齋阿部喜任著／男碧海阿部為任校／江戸服部雪斎画／慶応三年丁卯之秋八月／発兌書肆／江戸日本橋通二丁目／山城屋佐兵衛」。

本書は20種の鳥を選んで、鳥名の英文綴りに発音を片仮名と平仮名で付したものの。漢名と和名（平仮名、あるいは片仮名表記）、服部雪斎による彩色図を添える。第16丁裏には鳥名ではなく、鳥の部分の名称や食物・肉・巢・卵など9の英単語を和文と対応させて表にする。序に「世に英語箋ありて行はれ、之か階梯たりと雖も、片仮名をさへしらざるものあり、今その書に拠り、その物を図にし、世に公にして、児と乳母の階梯となす、児や母や、能くこれを玩弄はむや否や」という。今日の子供向け英単語入り鳥類図鑑の如きもの。『英語箋』は長崎の石橋政方編著で万延酉歳、改元して文久元年（1861）に板行された。本書の英単語は『英語箋』に記載される41種の鳥のなかから選ばれている。『英語箋』には鳥のほか獣・魚介・虫・草・木の部があるので、獣部以下も引き続き予定されたと推定できるが、果たされなかった。

○5月、阿部友之進『挿訳英吉利文典』<sup>(118)</sup> 3巻3冊を板行。阿部氏蔵板、日本橋通り十軒店の播磨屋喜右衛門の売り出し。

第1集にある奥附（第二集・第三集にはない）は「慶応三年丁卯仲夏新鐫／阿部友之進著」。版心下部に「将翁書軒」とある。Lesson 1のはじまる第一集第7丁以下の版心には「初集」、第二集・第三集の版心にはそれぞれ「二集・三集」とある。揚江学人大日斤が序を寄せる（本書は英文にあわせて左開きのため、和文で書かれる序文も縦書きながら左の行から右へ読ませる）。

揚江学人の序にあるように、学問に志はあっても僻遠の地にあつて師に恵まれぬ者にむけて、その助けとなるべき啓蒙書として出板されたのである。自習用の、いわゆる虎の巻である。

巻頭にブロック体のアルファベット大文字・小文字を掲げて、それぞれ片仮名・漢音で発音を付し、また筆記体を付す。本書は幕府の開成所が板刊した“THE ELEMENTARY CATECHISMS. ENGLISH GRAMMAR.”の第5版（1866年）にもとづいて、その英文を筆記体で載せる。第一集（本文31丁）はLesson 1からLesson 7まで、第二集（本文35丁）はLesson 8からLesson 17、第三集（本文30丁）はLesson 18からはじめられLesson 24の途中で終わっている。第四集以下も予定されたのだろうが、未刊に終わった。英単語の上部には片仮名で発音を、下部には単語の意味を記す。単語には

訳出の順序を漢文式の返り点のように囲み数字で示す。片仮名で示される発音はオランダ語訛りが交ざり、単語の訳も不正確なものを含むが、英文の構文はおおむね正しく把握されている。当時刊行されていた英語学書を参考にしたのだろうが、かなりの英語力が窺える。

この阿部友之進は櫟斎のことか、櫟斎の嗣子為任（号碧海）か判然としないが、本年8月板行『英学捷徑七ツ以呂波』との比較検討から為任とするのが妥当かと考える。とすれば、為任はこの年には将翁書軒の書齋号を使用していることになる。開成所刊行『英吉利文典』原本となったのは、1850年にロンドンで出版された文法入門書で、開成所の活字方榊令輔によって作成された活字によって復刻された。文久2年（1862）頃の刊行と推定されており、当時、英学を志す人でこの書によらぬ人はなかったというほどで、開成所『英吉利文典』は慶応3年（1867）までに6版を重ね、明治3年（1870）には老叟館（万屋平四郎）の蔵版として刊行され、当時のもっとも利用された英語教科書の一つであった。

- 8月、碧海阿部為任『英学捷徑 七ツ以呂波』<sup>(119)</sup> 板行。巴菽園蔵梓。東京書林日本橋通十軒店播磨屋喜右衛門の売り出し。

濃緑色の表紙で縦178×横117mm。左綴じの四針眼。中央に赤色の題簽で「英学七ツいろは 全」。本書の著者が碧海阿部為任であることは見返し・奥附・自序に明記される。「慶応丁卯の秋月」碧海阿部為任の自序を付す。序の裏面には囲み枠のなかに「慶応三年九月／本宅鏤板印造」の文字が刻される。見返しには「巴菽園蔵梓」とある。これの意味するところは幾つか考えられる。為任は父櫟斎と同居していたため同じ書齋号を名乗ったか、または巴菽園の堂号を譲りうけていたか、あるいは為任の著書を父櫟斎が出資して出版し「巴菽園蔵梓」としたか。いずれも確定的なことは不明である。奥附は「慶応三年丁卯仲秋新鐫 碧海 阿部友之進著」および売り出し書林名。版心にはやはり「将翁書軒」とあって板面が四周単辺で縦横同じ長さであること、版心が黒魚尾であることなど『挿訳英吉利文典』と極めて類似する。自序には「このいろは、並に横字、五十韻字等は、英人著述の、日本文法書、十韻字等は、英人著述の、日本文法書、又日本辞書より、抄出したる者にして、敢て憶断私意を以てするものにあらず」という。この言葉のとおり英文字体は開成所刊『英吉利文典』によっており、前著『挿訳英吉利文典』の字体と一致する。前著・本書とも『英吉利文典』を原本としたことは確かである。

さらに本書の序文「た、僻村遠郷にある、児童初学の捷徑ならんかといふ」は、ほとんど『挿訳英吉利文典』の序と同内容ある。両著とも同じ目的をもって板行されたのである。全18丁（うち本文は16丁）。

本書には2種の板種がある。見返しに「巴菘園蔵梓」とあるものが初板で、上述したもの。もう一種は新たに彫まれた異板で、かぶせ彫りによるか。「巴菘園蔵梓」を欠き、自序・「慶応三季九月本宅鏤板印造」の文字・奥附を欠く。版形も縦182×横125mmと初板より縦横ともに少し大きくなっている。題簽は黄色の用紙で、初板と同様に「英学七ツいろは 全」とされるがこれも新たに刻まれたもの。本文のみの全16丁。2種とも岩手県立図書館の蔵書で、同じ請求番号 [37-37] が付される。できれば、請求番号を区別すべきと思う。

## 明治元年 (1868) 戊辰 64歳 \*慶応4年、改元して明治元年

○慶応4年春板行『吉原細見』<sup>(120)</sup>（玉屋山三郎蔵板）に「楽木山人」の署名で「吉原細見記之序」を寄せる。序の末尾は「戊辰の梅月 楽木山人謹んで白す」。「山中宰相」の朱文印がある。

○幕府の駒場薬園は植村政勝以来、代々植村氏の預かりであったが、維新後は朝廷に引き継がれた。このとき櫛齋は駒場薬園の御薬草培養方として官舎に住んだ。櫛齋の下には吉田慶助ほか園丁8人がいた。

同じく幕府の経営した小石川薬園も維新後は岡田・芥川両氏の預かりのまま、いったん医学所頭取前田信輔・大西道節が請け取り東京府の管轄に移管した。櫛齋は植村千之助とともに御薬草栽培方試補に任ぜられた。小石川薬園は明治2年には大学東校の管轄に属し医学校薬園となり、同4年7月には文部省の所管となる<sup>(121)</sup>。

○櫛齋が駒場薬園の任にあったころ、京都本圀寺塔頭智善院撰『象志』1冊（享保14年刊）を筆写し、所見を補ったという<sup>(122)</sup>。

巻頭に「作者名性ヲ著サス予か所見ヲ輔輯シ異日之参考之助ケトセントス駒場御用ニテ明治元年将翁喜任誌」の識語がある。識語にもかかわらず、本書に櫛齋の「所見ヲ輔輯」した跡は見当たらない。あるいは後に手を入れるつもりで筆写し、そのままになったか。

○冬、パリ万国博覧会から帰国した田中芳男からイリスフロレンチナの生根を贈られる。

櫛齋はさっそくこの根を植え付け、4月には花を得た。蕙崖吉田脩輔に

写生を依頼して成った写生図を同志に配布した（未見）。さらに、この根を番町九段坂と駒場の御薬園にも移植して、櫟齋みずから栽培し繁殖をはかった。

「イリス」については、かつて林洞海から質問され解決できずにいた。この疑問が田中芳男によって齎された生根によって解消したという。イリスは現在ではアイリスの名で知られるアヤメ科の植物である。櫟齋はこの植物に「たなか、いりす」と名付け、「一名あべ、いちはつ」とした。この経緯は櫟齋自筆の『格物瑣言イリス草考』<sup>(123)</sup>に述べられている。櫟齋はこの命名にあたって、草稿のなかで「ヨシオイリス・アベイチハツ・白花射干」などともして、迷っている様子が見える。

『格物瑣言イリス草考』は櫟齋による自筆草稿本で、櫟齋自身による訂正の跡が残る3種類の草稿が合綴される。用箋は全冊「又新消夏録 | 卷 | 巴菽園葉本」と刷られたものを用いる。本書の表題には「格物瑣言」と「又新消夏録卷之十」の2つが記されている。「格物瑣言」の書名からは天保3年に板行された『格物瑣言卷之一』の続編を予定した草稿とみられるし、「又新消夏録卷之十」からは『又新消夏録』なる随筆集の卷之十に相当するかも考えられ、どちらを採るべきか決め難い。

本書には同一内容の初稿、二稿、最終稿が合綴される。第13丁～第16丁が最終稿と考えられる。第1丁の右枠外に「又新消夏録／東京□櫟齋□阿部」<sup>ア</sup>、この左に並べて「格物瑣言 東京□櫟齋阿部喜任纂述」とする。また、第1丁本文巻頭には「男碧海 阿部為任 淡路 雀羽大村寛 校」とある。第8丁表の右枠外には「又新消夏録卷之十 櫟齋 安倍喜任 薈粹／男碧海為任校字」とする。「安倍」の「安」の字は「阿」と書きかけた形跡があり、このころは「安倍」と意識されていたように見受けられる。また、第16丁表、本文末には「櫟齋□安倍喜任誌」とされ、朱筆によって全体を一字分上げる指示があり、刊行を意識しての指示と考えられるが未刊におわった。

### 明治3年(1870)庚午 66歳

- 4月14日、櫟齋の後妻没す<sup>(124)</sup>。法名は宝信院天安通益大姉。梅林寺に葬られる。
- 10月19日、阿部櫟齋没す。66歳。

櫟齋の没年は明治3年10月19日説と同10月20日説とがあった。阿部家菩提寺である梅林寺（曹洞宗、台東区三ノ輪1-27）の「過去帳」明治三庚午



年の欄に「土 宝珠院殿義簪華将翁居士 十月十九日 阿部将翁事」とある。「土」は土葬を意味する。

### 明治8年(1875)乙亥

- 3月, 安倍為任訳・伊藤謙校補『植物学訳解』<sup>(125)</sup> 8巻3冊を板行する。第3冊の巻末に「植物学訳解卷八大尾」とある。全8巻3冊。奥附に「安倍為任訳蔵版」とある。甘泉堂和泉屋市兵衛発兌。東京書林5店, 大坂書林3店の売り出し。

### 明治9年(1876)丙子

- 7月, 安倍為任・富士越金之助の編輯『日本地誌略』<sup>(126)</sup> 上下1冊が刊行される。「官許明治八年六月十七日」, 富士越金之助の蔵板, 合書房発兌。

見返しに「安倍為任・富士越金之助編輯 北海道・柯太州・琉球国之部」とあるように「北海道・柯太州・琉球国」の地誌が合冊される。内題によれば, 「北海道十一国」が為任の編輯で, 「柯太州」は富士越金之助の編輯。「琉球国」については編者名が記されていないが, 「北海道」の版心には「日本地誌略上」, 「柯太州・琉球国」の版心には「日本地誌略下」とあるから, 下を分担した富士越金之助の編輯であろう。地理的概説の末尾には, その地方の「物産」が列挙されている。

- 8月5日, 安倍為任編纂『漢語字引事物異名開化消息往来』<sup>(127)</sup> 1冊(安倍氏蔵版)を板行する。

開化期に相応しい内容の書簡文の書き方。上欄には「漢語字解・事物異名・請取證書之部」を附す。維新後の新社会に必要な語句などを多く解説し, 各種届けの書式を例示する。奥附に記す為任の住所肩書は「東京第三大区九小区麴町十二丁目／東京府三拾五番地平民」。

### 明治10年(1877)

- 6月29日, 安倍為任編輯『新選物品識名』<sup>(128)</sup> が竹川藤助によって出版される。奥附にある安倍為任の住所は「第六大区八小区本所松倉町二丁目八十五番地」。

架蔵本は巻頭と巻末に「安倍図書之記」(朱文方印)をもつ為任の旧蔵書。ごくわずかだが, 為任により訂正がなされる。この訂正はあるいは再板を意識したものか。

櫟齋および為任の旧蔵本に岡安定（寿櫟齋）『品物名彙』<sup>(129)</sup> 1巻（安政6年（1859）12月刊）がある。第1丁表に「安倍図書之記」（朱文方印），巻末には「安倍喜任」（白文方印），奥附部分には「本石阿部」の朱印がある。本文末尾に「本草家阿部櫟齋翁手澤本／明治廿五年五月神田小川町書肆ニテ検出し購求ス礫水識」と旧蔵者白井光太郎による識語がある。本書には，片仮名によるラテン語名・英名・蘭名（ときには欧文綴り）を含み，かなりの書き込みがある。櫟齋旧蔵本であることに誤りはないが，第48丁裏の左欄外に「為任」の名が書かれた貼紙もあり，この書き込みは櫟齋によるものも交ざっている可能性は否定できないが，為任によるものであろう。

『品物名彙』巻頭にある「引証書目」には「花暦百詠・植物学・地球略説・博物新編・智環啓蒙・瀛環志略・海国図志（棒線で抹消）・聯邦志略・啖咕喇紀略・万国公法・西医略論・玉石志林・牧民心鑑」が墨書によって増補されているが，『新選物品識名』の「引書標目」にはこのうち「花暦百詠・植物学・地球略説・聯邦志略」がみえ，為任の朱筆訂正では「古今秘苑」にかえて「博物新編」が加えられている。また，この書き込みの幾つかは『新選物品識名』に生かされている。『新選物品識名』の編纂には『物品識名』とともに『品物名彙』も参考にされたのである。

○この年，小野職愨撰・阿部為任解『博物教授法』（文部省蔵版）が出版される<sup>(130)</sup>。

## 明治11年（1878）戊寅

○8月，阿部為任は『勸農必携驅虫法方』<sup>(131)</sup> 1冊（13丁）を出版する。

内題・見返し・元題簽とも「勸農必携驅虫法方」。巻頭に「故櫟齋安倍喜任口授／男 安倍為任 増訂」，元題簽には「安倍喜任著／同為任校補」とあり，本書を櫟齋の遺著とするが，実は大蔵永常の『除蝗録』（文政9年刊）の内容を簡略に書き直したもの。収められる挿図も『除蝗録』と同じではないが，明らかに模したもの。見返しには「蝗を驅ふ事を記す」と本書の内容を紹介する。

本文巻頭は「総論」として「夫勸農ハ富国強兵ノ基ヒナリ。国富ザレバ必弱シ富国ノ兵ハ必強シ」とはじめられ，当時の明治政府の富国強兵策に応じて出版されたものであることがわかる。

## 明治12年（1879）己卯

○10月、安倍為任編輯『農業図解』<sup>(132)</sup> 上下2巻2冊を刊行する。

農事に関する作業や道具、あるいは日常の生活用品などをイロハ順に絵で示したもの。児童向けの啓蒙書。為任の住所は本所区仲ノ郷原庭町卅四番地（奥付）。

## 明治13年（1880）庚辰

○3月10日、樗斎『新刊唐宋聯珠詩格』<sup>(133)</sup> 上下2巻2冊（小横本）が出版される。奥附には「修者 故人安倍喜任」とある。発兌人、山中孝之助。出版人、浜野貞助・斎藤栄作。

本書は『新刊唐宋千家聯珠詩格』の原文に返り点と読みを付した初学者向けの啓蒙書。樗斎が漢学にも力を注いだことを裏付ける。樗斎の著書出版のはじめとなった『聯珠詩格名物図考』（文政13年）は『新刊唐宋聯珠詩格』に出てくる自然物の図入り解説書であった。古典にみえる名称と物との考証は、本草研究の一環として名物学として確立した研究分野だった。樗斎は漢詩もものしており、この書については名物学研究と詩学研究が分けられる事なく行われたのだろう。

○4月10日版権免許をもって、為任は『東京及横浜全図』<sup>(134)</sup> 1冊を出版する。元題簽には「開化明細」の角書がある。銅版、色刷り。上部には世界の国旗、下部には名所図を附す。編者識に「東京并ニ横浜ノ一覽図ナレトモ東京図ハ世上ニ数十ノ上本アレハ唯其様ヲ載スノミ横浜ヲ明了ニシタル図ナレバ其港ヨリノ各地方へ里程ヲ記ス譬バ横浜ヲ球ノ全形トシ東京ヲ球ノ四分ノ一トセシ故四方ノ君子其長短ヲトカムルコトナカレ」とある。為任の住所は本所区中之郷原庭町卅四番地。

## 明治26年（1893）癸巳

11月12日、阿部為任没す。49歳。梅林寺に葬られる。

梅林寺『過去帳』には下記のようにある。

明治廿六癸巳年

土 自明院異濤碧海居士 十一月十二日

靈

本所区表町六十二番地

阿部為任

弘化<sup>アヲ</sup>二四月九日生

◎成立年不明（おそらく明治になってからの成立か）のため、年譜には入れ

なかったが、櫟斎の著書に『植学便覧』折本1帖〈特1-3261〉がある。これまで指摘されていない重要なものであるので紹介する。広げると縦163×横336mmの台紙に天地134mmの草稿が貼り付けられる。新しく付けられた見返しには「将翁阿部喜任著／植学便覧」の表題がある。内容はリンネ式の植物分類法と植物各部分の名称を解説したもので、次のように書き始めている（振り仮名は適宜略した）。

天地の間に、生活蕃育する処の万類を、蘇亦亜<sup>スウエシヤ</sup>の林那斯<sup>リンナウス</sup>十八等に、分<sup>わか</sup>畛<sup>ち</sup>その内草木類を区分に、鬚の長短位置によりて、ガラツセを建て綱と訳す、薬の数その他の証に拠てオルデ立てこれを目と訳す、この証に依て三十四綱に分つ、これ即本草植学の基本なりと知るべし

以下、花に雌花と雄花の区別があること、樹木にも銀杏<sup>イデク</sup>のように雌木と雄木があることを述べ、花の構造を解説する。

次に上段と下段に分けて、上段にリンネ式分類法の十八規則<sup>マツ</sup>として自然界の18分類（動植鉱物）を示し、根の種類を図示する。下部には雌雄の薬による分類例（第3綱～第24綱）を図示して代表植物名を付す。ついで、花の部分名、萼の7種、花の3種（雌雄完）、雄薬の部分名、雌薬の部分名、子室の8種類の名称に簡略な図解を付す。花卉の種類、植属の4種（草・科生・灌木・喬木）、花形の種類、一年草（トシクサ）・多年草（フユゴシ）、そのほか略図を付しながらそれぞれの植物部分の名称を示す。用語の解説には片仮名表記のオランダ語が添えられている。櫟斎自身がオランダ語原書から訳出編集したのか、あるいは翻訳書によったのかは不明だが、基本的には宇田川榕庵『植学啓原』によっている。どの解説もごく簡略だが、顕花植物に関する基本知識が盛り込まれており「便覧」の書名にふさわしい。

ここにみえる櫟斎の植物知識は、もはや伝統的な本草学ではない。明らかに西洋の近代植物学に属する。櫟斎が本草学の伝統を捨てたとは思えないが、新時代にふさわしい知識の吸収に努めていることを物語っている。櫟斎自身、植物研究において積極的にこの分類法を用いようとはしていない。いまだ、知識として学ぶにとどまっているようにみえる。引用した文中で、この分類法は「本草植学の基本」といっている。本書の内容は「植学」そのものであるけれども、「本草植学」の言葉からもわかるように、宇田川榕庵のように、本草学と植学とを明確に区別できていたか怪しい。櫟斎にかぎらず、この時代の本草学者の多くは本草学と植学（植物学）、両者の違いとその長所短所を

見極めることなく、西洋の近代学問を受容していったように思う。私は現代の学問研究はこの延長上にあることを真剣に考える必要があると考えている。

以下に、本文にふれ得なかった櫟齋収集の照任（将翁）著書ほか、櫟齋筆写本あるいは旧蔵書を列举して後の参考に備える。

◎櫟齋旧蔵、照任（将翁）著書（順不同）

櫟齋は折りにふれ、曾祖父照任の著書を集書している。櫟齋が集めた阿部照任（将翁）の著書には以下がある。

阿部照任『川烏頭附子并草烏頭附子之辨』写本1冊。元の仮綴の後表紙見返には、朱筆で「此書ハ屋代氏より乞写了する処也。今又栗本君之書と一校了／辛卯（天保2年一筆者）秋 喜任」の識語がある。また、『蘿摩之辨』の末尾には「文化癸酉冬十月十五日屋代性此書持参／則十六日夜写之／正睡軒写之」の識語があるから、本書は文化10年に正睡軒が屋代太郎の蔵書により筆写したものを櫟齋が入手し、天保2年秋に栗本丹洲蔵書によって校合したということだろう。本書には以下の照任著書①②が合冊される。

- ①『草烏頭附子之辨』。本文末の識語によれば延享2年9月の成立。扉には、この書名の下に「薬性辨其三十五全 廿四（廿五を訂正）」とある。本文の末尾（第15丁裏）に「余先年下野邦或相州駿州ヨリ取出シ献上ス并予門弟諸人ニモ教シ者也／時延享乙丑歳晩秋穀旦，阿部友之進照任」，尾題の下に「此書屋代太郎ヨリ借用写之／于時文化十癸酉晩秋日」の識語。『草木育種後編』卷之下第13丁「附子」の記事中にある「将翁先生製法考あり」は本書のことか。
- ②『蘿摩之辨／女青之辨 合全 其三十五（右に廿二）ノ二』の扉のもとに、『女青之辨／蘿摩之辨』の2書が合冊される。『蘿摩之辨』の末尾には「文化癸酉冬十月十五日屋代性此書持参／則十六日夜写之／正睡軒写之」の識語。『女青之辨』末尾には「今戊申七ヶ年以前享保七年壬寅歳八月甲州ノ丹波山ヨリ采出シ献シナリ龍術ノ女青ハ人多ク是ヲ知ル故ニ不献／享保十三戊申年／安倍友之進照任」の識語がある。『女青之辨』の成立は末尾識語によって享保13年と推定できる。
- ③『金之書 十四（十四は朱筆）』（扉題）。本書の巻頭と巻末に楕円形の「将翁軒」の朱印がある。なお、仮綴じの際の元表紙の右下に「共二十七」とある。
- ④『石薬之辨 四（四は朱筆）』（扉題），内題は「砒石」。「砒石・砒石・金・銀・鉛・銅・殺生石・凝水石」についての解説。巻末に「享保十二丁未年／月日阿部友之進」，さらに「此一<sup>ニ</sup>本医官木村元長蔵之／栗本丹洲君（以下余

白)／辛卯之初秋校 喜任」の識語あり。

③④は合冊されて1冊。

- ⑤『上言本草』写本1冊。東博〔和9〕。目録の第1丁表右下に「樸齋」「漫園齋藏」の朱印。目録末尾に「安部氏」(28×28mm)の白文方印、「(二字不明)」の丸朱印(直径24mm)、本文末に「阿部友之進照任／享保九甲辰年孟春」とあり、照任の署名の下に「炎帝之臣」の白文方印(28×28mm)がある。目録3丁、緒言2丁、本文「出羽奥州両国之物」(1オ～77ウ、77ウは墨付き無し)、「諸国之物」(78オ～100ウ)から成る。「炎帝之臣」の朱印があるからか、『東京国立博物館蔵書目録(和書1)』では照任自筆本とする。巻末には「此書其廿七ト御座候近頃手ニ入候間御覧入候」とあり、見返しに「其二十七 上言本草百三拾種」の逆文字が透けて見える。①『川烏頭附子并草烏頭附子之辨』の扉の「廿四」、②『女青之辨・蘿摩之辨』の扉にあった「其三十五(右に廿二)ノ二」を考え合わせると、この数字は樸齋が照任著書を整理する際に付した番号ではないだろうか。

- ⑥『奉使蝦夷行記』写本1冊。東博〔和647〕

第13丁の1丁は版心に「本草図譜 卷之 獸部 巴菽園葉本」と刷られた用箋。

⑦そのほかの樸齋の筆写本・旧蔵本など(順不同)。

- ①曾占春『国史草木昆虫攷』写本6冊。「樸齋阿部喜任領此書之大意」「静春藥室」の朱印をもち、時に樸齋による書き込みあり。東博〔和92〕。
- ②曾槃(占春)撰『国史草木昆虫攷』10巻序目1巻、附「国史外品動植攷」1巻、10冊。『大東急記念文庫書目』376頁に「阿部喜任補」として載るが未見。
- ③稻生若水編『庶物類纂草属卷之一』写本1冊(全38丁)。

題簽はなく、表紙に直接「庶物類纂草属」と墨書(「草属」は朱筆)される。第1丁表右下に「漫園齋藏」(縦28×横28mm)の朱文印、第38丁には「阿部家藏」(縦45×横17mm)の朱文印があり、筆跡からも樸齋の筆写である。後半部分は判読不能だが、欧文文字で「Abe…」(前表紙・後表紙とも)と書かれている。これも樸齋によろう。この欧文がいつ書かれたか確認できないが、樸齋はこのころ既にオランダ語の学習をしていた可能性がある。

- ④小原良直『外科正宗薬品異名考』2冊、天保6年5月刊。杏雨〔乾1429〕。

各冊とも巻頭上部に「阿部氏藏」の朱印。

- ⑤『重修政和經史証類備用本草・大観本草』刊、13巻11冊(第2・3冊は欠)。杏雨〔杏3177〕

各冊（第8・14冊を除く）の巻頭上部に「将翁軒」の楕円形朱印。目録の末丁および各冊巻末に「櫟斎阿部喜任／領此書之大意」の朱文方印。巻9・17冊の巻頭には上記の2印ともあり。

- ⑥林羅山『新刊多識編』刊，5巻1冊。東博 [和3263]。

各巻の巻頭に「櫟斎」の朱文方印がある。

- ⑦田村元雄『朝鮮人参耕作記』宝暦13年刊，1冊。東博 [和2500]。

序の第1丁表に「櫟斎阿部喜任／領此書之大意」「漫圃斎蔵」の朱文方印。後序最終丁に「草顛逸民櫟斎」の署名に「阿部家蔵」の朱文方印。内容目録の抄出など、櫟斎の書き込みあり。前表紙右下方に「草顛逸士」の墨書、見返しの裏面に「草顛逸民」の朱筆あり。

- ⑧曾占春『人参識』上・下，写本1冊。巻上巻頭に「櫟斎阿部喜任領此書之大意」の朱印あり。東博 [和219]。

- ⑨小野蘭山『広参説』文化7年刊，1冊。「櫟斎阿部喜任領此書之大意」「櫟斎」「喜任」の朱印をもつ。東博 [和275]。

- ⑩水谷豊文『物品識名』乾坤，刊2冊。杏雨 [杏6151]。

それぞれ巻頭に「安倍図書之記」「将翁」の朱文方印。書き込み多し。

- ⑪貝原益軒『大和本草』刊，第1冊（巻之1・2）のみ。東博 [和197]。

叙の第1丁表に「将翁軒」の楕円形朱印，「春菴損衣食所聚」「亨父珍秘」の朱文方印。巻末丁裏に「阿部家蔵」の朱文方印。後見返しに「草顛書堂」の墨書。書き込み多し。

- ⑫『和漢人浸考』安永3年9月補正刊，1冊。東博 [和2503]。

内題は「附録／和漢人参考」。表紙に「朝鮮人参耕作記／人浸耕作記／官制参辨／蘭山広参説」の墨書。巻頭に「静春葉室」の朱文方印と「喜任」の白文方印。「和漢人参考後編」第7丁表の人参図左下に「櫟斎阿部喜任／領此書之大意」の朱印。巻末の「鳥巢先生著述書目録」第1丁表に「是高橋善庵所蔵也常架挿／予書庫免事両丁童子之器／以可狂 喜任」の墨書。

- ⑬大口灌畦『薬品弁或』巻上・下（宝暦4年刊）合本1冊。巻上巻末および巻下奥附に「櫟斎」の朱文印。櫟斎による書き込み，朱筆あり。東博 [和269]。

- ⑭西尾豊作『東條琴台』（1918年，西尾豊作発行）224～228頁に閏月21日付，越後高田の琴台に宛てた櫟斎書簡が紹介されている。原本の所在は不明。

本稿では所蔵機関名を以下のように省略して記した。なお，当館所蔵本の請求番号はくゝ内に，他の所蔵機関の請求番号は〔 〕内に示した。

国立国会図書館→国会，国立公文書館内閣文庫→内閣，東京国立博物館→東

博，武田科学復興財団杏雨書屋→杏雨，西尾市教育委員会岩瀬文庫→岩瀬，東京大学総合図書館→東大総合など。他にもこれに準ずる。

## 註

- 1) 阿部家菩提寺梅林寺（曹洞宗。東京都台東区三ノ輪）の過去帳。樸斎の曾孫にあたる阿部士郎氏（東京都荒川区）所蔵の阿部家系図および島田弘文氏所蔵の阿部家系図。梅林寺の御住職喜谷良宗氏には大変お世話になった。
- 2) 『南嶼建白書』については註101参照。
- 3) 戸田旭山編『文会録』は『博物学短篇集〈下〉』46頁（恒和出版〈江戸科学古典叢書45〉，1982年）による。
- 4) 『文化十四丑年ヨリ入門控帳』〈特1—2612〉。
- 5) 寛政甲戌年12月14日曾槃序『張方薬注』写本1冊。東博 [和230]。
- 6) 『多識問答』写本1冊。東博 [和2377]。
- 7) 曾占春『占春先生救荒本草和名選』写本1冊。東博 [和2382]。
- 8) 『湖魚譜・清朝俗名』写本1冊。東博 [和893]。
- 9) 曾占春著『占春斎統禽志』。東博 [和149]。
- 10) 樸斎著『草木育種後編』（天保8年序刊）第19丁裏「巴豆」の記事。
- 11) 『隱居放言』巻之六「石燕」の条に「文政丁亥夏予採葉於武之秩父比企諸郡嘗入乳穴洞中得石燕」とある。
- 12) 『呂宏昭薬品答』は『質問志』（東博 [和1007]）所収による。
- 13) 又玄堂『本草会出席簿』〈特1—2613〉。文政11・12年の2年分の記録を収める。
- 14) 樸斎編著『捋翁軒禽譜』自筆草稿本2冊。東博 [和150]。
- 15) 舜水談話『時物正誤』写本1冊。東博 [和3925]。
- 16) 樸斎筆写『春之七種』写本1冊。東博 [和83]。
- 17) 曾占春『春の七くさ』刊1冊。〈特1—1890〉。
- 18) 『巴豆考』一枚（木板色摺）。①坂本浩然『琉球奇花写真底稿』，東大総合図書館 [A00-4601]。②③平戸の松浦史料博物館蔵 [Z106-1331] と卷子本の2点。④高知県立牧野植物園の1点（牧野富太郎による写本）。なお、『類集写真』の項を参照のこと。
- 19) 『物産叢書』第2冊。杏雨 [杏1556]。
- 20) 『類集写真 巻之九』（ロシアのサンクト・ペテルブルグにあるコマノフ植物研究図書館の所蔵）。1995年2月～3月小田急美術館において「シーボルト旧蔵日本植物図譜展」が開催され、『類集写真巻之七』（彩色図譜）が出品された。本書は少なくとも9巻はあったはずで，他の巻の出現が期待される。成立年や書誌的な詳細は不明。現状は，もと冊子形態であったものを糸をはずして一枚づつにした状態になっている。このシーボルト旧蔵資料の里帰り展で出品された史料は丸善書店から『Siebold's Florilegium of Japanese Plants』として刊行された。本稿はこの資料集によった。
- 21) 渡辺刀水『平田篤胤と交渉をもつ人物』（『伝記』第3巻第1号，1936年）48頁。
- 22) 樸斎『聯珠詩格名物図考』草部2巻2冊。〈特1—605〉，岩瀬 [25-47]，岩手県立図書館 [新09/K51]。
- 23) 『茶匯』の表題のもと，曾占春『烹茶樵書』と大窪詩仏『茶寮図笈』が収められる。享和



- 3年識語、板行。刊1冊。〈特1-2601〉。
- 24) 『花暦百詠』文政6年刊、2冊。杏雨 [杏2166]。
- 25) 東條琴台『先哲叢談続編』巻之四(架蔵)の「阿部将翁」の記事。島田弘文氏所蔵『阿部友之進輝任伝』には「名ハ輝任一作照任、字ハ伯重、丹山ト別号シ」とある。
- 26) 御子孫に伝わる『阿部友之進輝任伝』(写本)に「阿部将翁ハ有名ノ本草家ナリ。名ハ輝任一作照任字ハ伯重、丹山ト別号シ友之進ト称ス」とあるが、この資料はおそらく後の成立と思われる。照任の同時代の資料では丹山の号を確認できない。
- 27) 東條琴台編著『続唐宋聯珠詩格』2冊(嘉永6年刊)。
- 28) 『物産叢書』第4冊、杏雨 [杏1556-4]。
- 29) 『東都釣独稽古』刊、折本1帖。馬喰町二丁目金幸堂菊屋幸三郎売出し。東京大学総合図書館 [YB30-74]。『同』文化14年写1枚、東博 [と7202]。『東都釣師魚獵大全』写本1枚、〈特1-3097〉。
- 30) 范成大著『梅譜菊譜』刊1冊、〈特1-1859〉、都立中央 [加賀3984]、岩瀬 [120-149] [1-97]。
- 31) 『櫻欄樹藝考』は未刊におわたった襟齋の『草木育種続編』(東博 [和1006])に合綴される。
- 32) 『隠居放言』巻之三「檀」の記事に、「天保之有三壬辰夏、喜任偶採葉於相之箱根山中得一種之樹」とある。
- 33) 『隠居放言』巻之三「粉榆滑之」の条に、「喜任以天保壬寅秋採葉於奥之岩城、見土人之抄紙皆用榆皮之粘汁。(中略)家兄信任著製楮要訣以諭抄紙之法」とある。「家兄」の記事は杏雨本にはなく、岩瀬本で加筆される。
- 34) 畑銀鷄『書画薈粹』初編中之巻。架蔵。
- 35) 『格物瑣言』刊1冊。〈特1-2944〉。
- 36) 畑銀鷄『銀鷄一睡南柯乃夢』。『日本隨筆大成』第2期20(吉川弘文館、1974年10月)所収。
- 37) 『珍卉図説』写本1冊。〈特7-185〉。
- 38) 『救歎拳要』巻之上下1冊、天保4年9月例言・刊。題簽および見返しは「豊年教種」。小本、およそ縦18×横12cm。見返しに巴菽園蔵版。奥附に須原屋茂兵衛～鶴屋喜右衛門の13店の売り出し江戸書林名があるもの(〈特1-2581〉、〈209-32〉、杏雨 [杏1342])。見返しは新たに板を刻み萬笈堂・圭文閣・衆星閣発兌とし13店の売り出し書店名を記すもの(杏雨 [杏937]、岩手県立図書館 [499-6])。見返しに萬笈堂・圭文閣・衆星閣発兌とあり、奥附の売り出し書店を欠くもの(〈特1-2667〉)などがある。
- 39) 上野益三氏は、将翁が『御葉草御用勅書』に「享保十七年…私年六十余齡ニ相成」と記していることによって、「襟齋の記事は直ちに信じ難い」とする(上野『年表日本博物学史』513頁)。
- 40) 畑銀鷄『御代の宝』、刊1冊、架蔵。冒頭近く「今年天保四年癸巳の八月上旬よりたまへ米価騰踊して都下の困民おほいにまどひさわざければ」とあるから、天保4年の板行か。
- 41) 畑銀鷄『日ごと的心得』1冊(21丁)天保4年序刊。〈特1-2593〉。
- 42) 東條琴台は『補機新書』巻之上下、写本1冊、内閣 [182-211]。遊び紙に、織田完之による「此書ハ東條文左衛門遺稿残欠ナリト雖トモ備荒ノ要領ヲ得タルモノ。明治八年頃何人ヨリ借タルヲ忘レタリ。平尾録蔵ハ東條ノ長男、予ニ出板ノコトヲ囑ス。未果」という識語がある。西尾豊作『東條琴台』(1918年、西尾豊作発行)59～91頁に翻刻され、その解題に「明治十八年に織田完之が琴台の息平尾録蔵と謀りて刊行したものである」

とある。

- 43) 高野長英著・渡辺華山画『勤農備荒二物考』天保7年刊1冊。東博〔和2607〕。「静春菜室」「樸齋」の印顆をもつ。
- 44) 山崎美成『疑問録』。(国書刊行会『続燕石十種』第二, 明治42年3月刊, 365~6頁)
- 45) 『枕草子草木考』写本1冊, 東博〔和126〕。杏雨書屋の写本〔杏6445〕は東博本の昭和9年筆写。
- 46) 『春菜七草考』写本, 仮綴1冊(墨付5丁)。架蔵。
- 47) 阿部輝任『疏黄盃根元製正誤』寛保4年正月刊1冊, 内閣〔195-258〕。
- 48) 『桜堤竹枝』楽木書屋板1冊。岩瀬〔119-100〕, 架蔵。
- 49) 藤田萬樹編『江戸現存名家一覽』刊1冊。〈123-222〕, 都立中央〔加賀1863〕。
- 50) 樸齋著『豆嶼行記』文久2年, 写本1冊。〈特1-2970〕。
- 51) 清水浜臣『金杉日記』(国書刊行会『続燕石十種』第2, 1909年)による。
- 52) 方外道人『江戸名物詩初編』1冊, 天保7年序刊(初板)。架蔵。本書には〈245-3〕, 〈69-139〕, 明大〔0993.64-32〕, 同〔915.5-143〕など諸板が知られる。また, 内題は『江戸名物詩初編』のまま, 題簽と尾題は『江戸名物狂詩選』と改題されるものがある。これは「諸先生品諸名物之図」を欠く。『江戸名物狂詩選』は〈208-107〕, 都立中央〔東京誌料441-3〕。
- 53) 方外道人『茶菓詩』刊1冊。天理図書館司書研究部編『近世文学未刊本叢書狂詩狂文篇』(養徳社, 1949年)に収められるものが初板だろう。明治大学図書館蔵〔0993.62-54〕は見返しは無記だが売り出しの際の袋が残っており, 「小倉菴蔵」と刷られる。
- 54) 『草木育種後編』卷之上・下2巻2冊。
- 55) 同7年曾占春識語『鳳梨の図』1軸。〈寄別11-54〕。紙本(4枚の半紙を継ぐ), 縦1147×横415mm。彩色図。本図の占春識語の末尾に「司馬峻/S kookam (以下不明)」の署名がある。本図には落款や蔵書印の類はないので確証はないが, 図を模写したのは司馬江漢かもしれない。本図には旧蔵者の識語が誌された紙片が添えられる。左上にある「鳳梨写真アナナス琉球人手図借贖了曾適山」は曾適山による覚えが。占春は昌適とも号し, 男士恭(号, 無腸)も昌適の号を用いたが, 「適山」は不明。下方中央には伊藤圭介が「鳳梨写生図 薩藩□(虫損, 占か) 春曾槃□(破れ) 蔵 司馬江漢画 錦窠伊藤圭介□(不明) 珍之」と記し, 2顆を押した紙片が貼付される。この右傍に「伊藤篤太郎曰, 此アダンノ図ハ阿部樸齋著草木育種後編ニ縮写出版セリ, 即原図也 伊藤篤太郎珍藏」とある。左傍には「花繞書屋蔵」とある。花繞書屋は圭介の書齋号。
- 56) 『栖枝小言』刊1冊。都立中央〔加賀2163〕。掃葉山房(東條琴台の書齋号)蔵板。全6丁の小冊子。会后, 配り物として刷られたものであろう。
- 57) この件については, 拙稿「文久年間の小笠原島開拓事業と本草学者たち」(『参考書誌研究』第49号, 1998年)を参照のこと。
- 58) 『草木育種統編』樸齋の自筆稿本1冊。東博〔和1006〕。
- 59) 畑銀鷄『天乃浮橋』は未見。ロバート・キャンベル「廓と博物学者—阿部樸齋の文苑採花—」(『国文学—解釈と教材の研究—』第38巻第9号, 1993年8月, 学燈社)110頁による。
- 60) 天竺浪人戯述『書画会肝煎鍋』天保9年閏4月刊, 1冊。〈京-312〕, 東博〔と3957〕, 都立中央〔加賀8323〕, 無窮会神習文庫〔10937-井〕。
- 61) 平亭銀鷄述『蔦葛恋之花菱』上中下3冊, 自筆稿本。岩瀬〔90-18〕。

- 62) 『万国全図』天保九年刊 1 鋪 (木版, 色刷り)。早稲田大学図書館 [文庫 8-C996]。横浜市立大学『鮎沢信太郎文庫目録』(1990年)には, 本図は彩色の東西二半球図で, 箕作省吾の「新製輿地全図」と高橋景保の「新訂万国全図」を手本にした折帖簡易版とも、『新製輿地全図』の偽刻ともいうとする。東半球と西半球が現在とは左右逆になっている。これは文化7年の凡例をもって幕府が板行した(実際の板行は文化12~13年頃とも)『新訂万国全図』と同様である。本図には諸板が知られ, 秋岡(国立歴史民俗博物館), 南波(神戸市立博物館), 鮎澤(横浜市立大学)の三コレクションで, 13~14の異種を数えることができるという。
- 63) 畑銀鷄『文人穴さがし』刊, 上下巻 1 冊。〈208-91〉。
- 64) 櫻溪主人著『長楽花譜』写本 1 冊。〈特 1-59〉。高知県立牧野植物園 [479.92-ABE] は国会本の明治期の写本で『獐耳細辛図譜』を合綴する。
- 65) 東條琴台『伊豆七島全図』(天保13年序刊) 1 冊, 東博 [と898]。架蔵。
- 66) 東條琴台著『先哲叢談続編』巻之四 (明治14年刊)。〈132-109〉。
- 67) 都立中央図書館『加賀文庫目録補訂版』(1980年)に樫斎の著として『隠居放言』3冊が載るが, これは細斗南の著『隠居放言』の誤り。
- 68) 鶴鶴貞高(為永春水)序『訂正補刻 絵本漢楚軍談初編』10巻10冊。徳田武「二つの『絵本漢楚軍談』と『西漢演義』(『近世文学と漢文学』1988年, 汲古書院)による。
- 69) 『春菜七草考』木版色刷り, 一枚。売り出し時の袋を付す。雑花園蔵。
- 70) 石井研堂『錦絵の改印の考証』(1920年, 伊勢辰商店発行)参照。
- 71) 白井光太郎『蘭山先生の七草図について』(『本草学論攷』第2冊, 春陽堂, 1934年)。
- 72) 東條琴台『魚後雞肋冊』第2集。〈234-28〉。
- 73) 清水礫洲『ありやなしや』(1907年, 彩雲閣) 75頁。
- 74) 田中芳男『摺拾帖』第4巻。東大総合 [A00-6010]。
- 75) 梅林寺『過去帳』。為任の没した明治26年11月12日の記事に「弘化二 四月九日生」と付記される。
- 76) 『静春堂雑抄』樫斎自筆 1 冊。早稲田大学図書館 [文庫 8/A205]。
- 77) 『又新堂消夏録』樫斎自筆 1 冊。東洋文庫 [三/MC/11]。
- 78) 梅林寺『過去帳』。
- 79) 畑銀鷄『現存雷名江戸文人寿命附』嘉永2年刊 1 冊, 都立中央 [加賀221]。
- 80) 『大日本近世史料 市中取締類集十九 書物錦絵之部二』(東京大学出版会, 1990年。379~388頁)に本図売り出しに到る, 売り出し書肆丁子屋平兵衛・江戸町年寄館市左衛門・町奉行・天文方の間のやり取りが載る。その結果, 天文方での吟味を経て嘉永3年11月に許可された。
- 81) 梅林寺『過去帳』。
- 82) 『藤岡屋日記』第二十九, 嘉永3年「珍話」。「藤岡屋日記」第4巻(三一書房, 1988年) 199頁による。
- 83) 曾占春・阿部喜任校『皇和草譜』写本 1 冊, 内閣 [197-82]。
- 84) 『大坂本屋仲間記録』第8巻(1981年, 清文堂) 403頁。
- 85) 『享保以後大阪出版書籍目録』(1936年, 大阪図書出版業組合) 18頁。
- 86) 『公私日録』樫斎自筆, 1 冊。〈W391-22〉。仮綴本, 縦247×横179mm。前表紙に「公私日録 喜任」「嘉永七年甲寅之正月吉日 又新堂」, 後表紙に「又新堂主人/額外之人」

と墨書する。

- 87) 乾純水『品物考証』2巻1冊, 安政2年刊。樗斎旧蔵書。東博 [和529]。
- 88) 樗斎『蝦夷行程記』巻之上下2冊, 安政3年11月刊。〈わ291-12〉, 〈w328-6〉。
- 89) 『草花図譜』写本1冊。東博 [和1033]。
- 90) 『補輯万宝魚譜』写本 (樗斎自筆) 1冊。東博 [和985]。
- 91) 『医員勤功書』第十六。金沢市立図書館 [16.88-19]。
- 92) 『廻村雑記』写本1冊。東博 [和2348]。
- 93) 『天工顛録』写本1冊。〈特1-550〉。東洋文庫 [X VII / 1-A / 1002] もほぼ同文。
- 94) 『二十国探薬記』写本1冊, 内閣 [117-1143口]。本書の写しが『二十国探薬記』写本1冊 (東京大学理学部附属小石川植物園 [S2958]) である。拙稿『『諸州探薬記』の書誌的検討』(『明治大学人文科学研究紀要』第40冊, 1996年) 参照。
- 95) 以下, 無人島 (小笠原島) での樗斎事蹟については拙稿「文久2年の小笠原島開拓事業と本草学者たち」(『参考書誌研究』第49号, 1998年) を参照のこと。
- 96) 『文久二年壬戌五月九日十日平安読書室物産会品目』刊1冊。〈特1-2441〉。
- 97) 樗斎は文久2年6月18日無人島へむけて江戸を立ててから, 翌文久3年5月江戸帰着, その後まもなくの6月4日までの日記を残した。『豆嶼行記』写本1冊。〈特1-2927〉。
- 98) 樗斎『八丈本草』自筆稿本1冊。東博 [和216]。
- 99) ブリュンメ著『東印度草木図説』(1835年刊, 2冊) は Blume, C. I. “BIJ - DRAGEN TOT DE FLORA VAN NEDERLANDISH - INDIE” で, 1825~1826刊が日蘭学会編『江戸幕府旧蔵蘭書総合目録』に載るが, 刊年が異なる。1835年版は高知県立牧野植物園に所蔵されたと思うが, 未見。明治8年に刊行された『動物学初篇』(田中芳男訳纂・久保弘道校訂・中島仰山函画) は Blume によったものであるが, これは主として動物に関する著書のように, 樗斎が携帯したものとは別著だったか。
- 100) 『豆嶼行記』(〈特1-2970〉) 末尾に, 白井氏によって筆写される樗斎の願書。『豆嶼行記』の閏8月1日の記事に「○少彦名命, 神社ニ納ム, ○旧友ノ靈ヲ碑下ニ埋祭ス」とある。
- 101) 『南嶼産物志』木部, 写本1冊。岩瀬文庫 [92-119]。岩手県立図書館蔵本 [太499-8] は岩瀬文庫本の忠実な写し。前稿「文久年間の小笠原島開拓事業と本草学者たち」で, 慶応元年の成立としたが訂正する。
- 102) 『出放題集』写本 (樗斎自筆) 1冊。〈848-205〉。
- 103) 『南嶼建白書』樗斎自筆, 1冊。函館市立図書館 [00494-052-6001]。この史料は『国書総目録』に阿部照任の著として載る『阿部将翁建白稿』(別名「南嶼献白艸」) であるが, 阿部樗斎による自筆草稿である。表題紙を含み全10丁。青色の表紙, 四針眼, 縦278×横188mm。無枠無界線 (縦245×横336mm) の用箋の綴じをはずし大きめの紙に軽く貼付し, 袋綴にして仕立て直してある。樗斎はこの願書に「阿部将翁」と署名し黒印を捺し, 名前の脇に「戌五十八才」と年齢を添える。
- 104) 石橋政方編著『英語箋』万延2年刊, 2巻2冊。〈わ833-2〉。
- 105) 『豆嶼行記』の文久3年2月3日の記事。以下の記事も『同書』による。
- 106) 『絵入英語箋階梯』(鳥之部) 刊, 1冊。〈特7-563〉, 〈120-153〉, 東博 [と1529]。
- 107) 『海雲楼博物雜纂』写本, 一枚物多数。都立中央 [特5126]。
- 108) 橋本玉蘭斎 (歌川貞秀) 画『万象写真図譜』小本1冊 (文久甲子孟春新鐫刊)。〈特1-2585〉, 〈特1-2658〉, 〈特1-2659〉, 〈特1-2660〉, 〈特1-2661〉, 〈特1-2662〉など。

- 109) 上野益三『年表日本博物学史』(八坂書房, 1989年) 385頁。
- 110) 『開成所人名録元治二年六月十五日改』。倉沢剛『幕末教育史の研究』第1巻(1983年, 吉川弘文館) 252~5頁に掲載の「慶応2年の開成所人名録」による。
- 111) 『巴菽園具譜』写本1冊, 東京科学博物館分館 [97]。曾占春の『渚の丹敷』に合冊される。
- 112) 梅林寺『過去帳』。
- 113) 「旧多摩郡新町村名主吉野家文書(4)」(東京都教育委員会編『東京都古文書集』第4巻, 1986年) 114頁。
- 114) 『[豆相植物写生図]』写本1冊。東博 [和97]。
- 115) 故岩崎常正著・小野職愨校閲・鶴田清次補正『本草図譜山草部』明治刊, 1冊, 架蔵。他に本書の所在を知らない。
- 116) 阿部樸斎著『獸譜』自筆稿本1冊。東博 [和952]。
- 117) 註106) 参照。
- 118) 阿部友之進『挿訳英吉利文典』刊, 3巻3冊, 早稲田大学図書館 [文庫8/C700]。〈835-A171s〉, くわ835-1〉, 岩手県立図書館 [太37~38] は初編1冊のみ。
- 119) 阿部友之進『英学捷徑七ツ以呂波』刊1冊。早稲田大学図書館 [文庫8/C645], 岩手県立図書館 [太37-37] (2点)。
- 120) 慶応4年春板行『吉原細見』(玉屋山三郎蔵板) 刊1冊 (墨付38丁)。都立中央 [東京誌料0792-45], 架蔵。
- 121) この項は上田三平・三浦三郎編『増補改定日本薬園史の研究』(渡辺書店, 1972年) 118頁による。
- 122) 『象志』写本(樸斎手写) 1冊。東大総合 [A00-6012]。
- 123) 樸斎『格物瑣言イリス草考』自筆草稿本, 1冊。静嘉堂文庫 [97-51概]。
- 124) 梅林寺『過去帳』。
- 125) 安倍為任訳・伊藤謙校補『植物学訳解』8巻3冊。〈特37-521〉, 内閣 [196-200], 東大総合 [T83-174]。
- 126) 安倍為任・富士越金之助編輯『日本地誌略』上下1冊。架蔵。
- 127) 安倍為任編纂『漢語字引事物異名開化消息往来』1冊(安倍氏蔵版)。都立中央 [東京誌料3923-12]。
- 128) 安倍為任編輯『新選物品識名』刊1冊。東博 [和2396], 架蔵。
- 129) 岡安定(寿樸斎)『品物名彙』安政6年12月刊, 1巻1冊。〈特1-2826〉は樸斎旧蔵本。
- 130) 大槻如電原著・佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』(1965年, 錦正社) 921頁。高知県立牧野植物園『牧野文庫蔵書目録(和書・漢籍の部)』(1994年二刷) 58頁に載る安部為任編・田中義廉閔・長谷川竹葉画『博物教授法』明治9年刊1冊がこれか。未見。なお、『同日録』には『博物図解』安部為任編, 明治9年刊1冊があるが, これも未見。
- 131) 安倍喜任口授・安倍為任増補『勸農必携驅虫法方』明治9年8月刊1冊。〈特1-2344〉, 内閣文庫 [183-268]。
- 132) 安倍喜任編『農業図解』2巻2冊, 〈YDM62475〉。
- 133) 樸斎著『新刊唐宋聯珠詩格』上下2巻2冊。架蔵。
- 134) 阿部為任『東京及横浜全図』刊, 1冊。架蔵。

(ひらの みつる 明治大学文学部教授)